

父の罪



094484-000-8

特10-198

父の罪

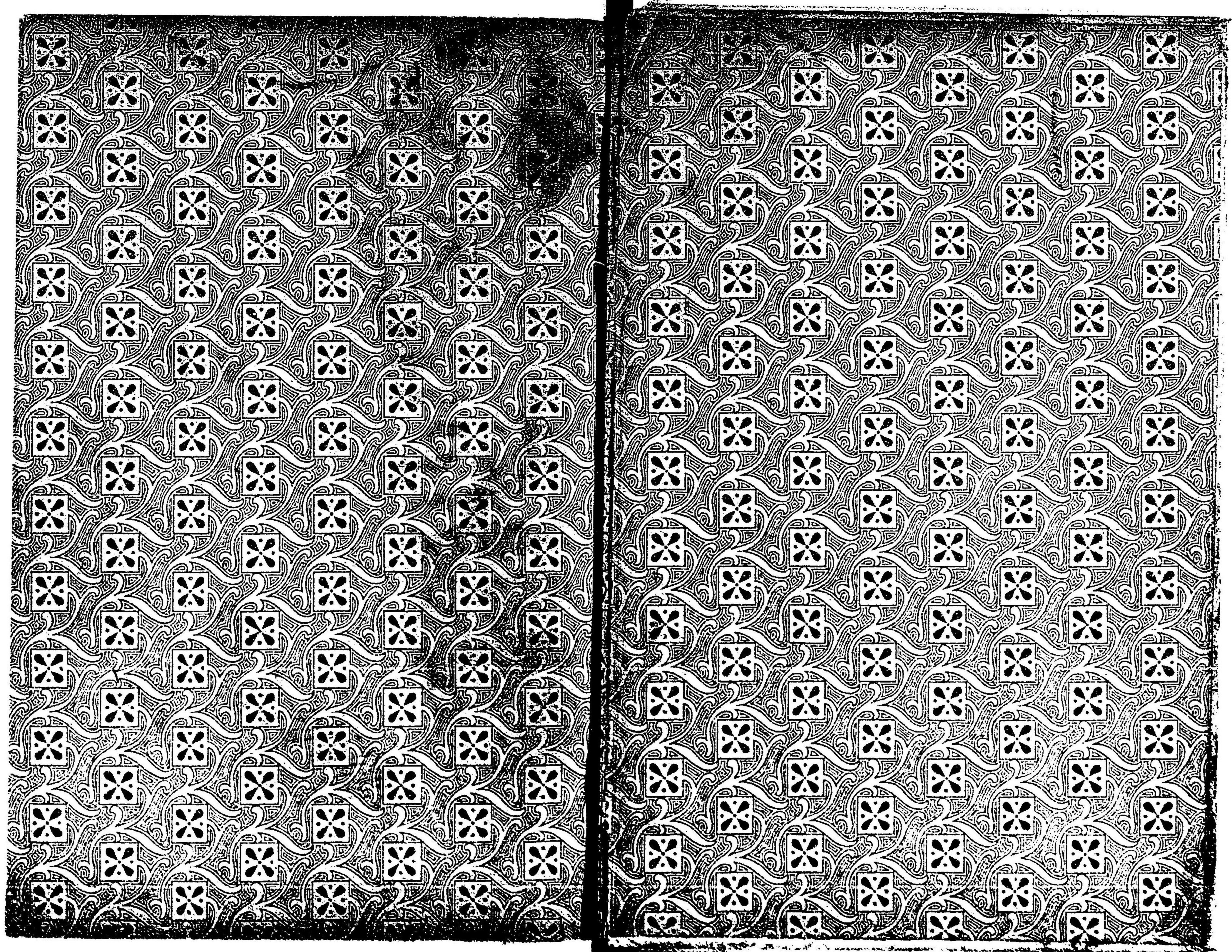
尾島 菊子/著

M44

DBQ-1996











飛

44.10.7

父の飛



この書を亡き父上の墓前に献ぐ

菊子







5710  
198

父の罪

父の罪

尾 島 菊 子

二月半の空つ風は、霜解けの屋根の瓦が凍てつくやうに冷たく吹き捲  
 ぐつた。街には既う瓦斯や電燈が華かに點いて、巷を行く人の歩調も慌  
 立だしげな黄昏の都門を破つて、下り列車は今新橋停車場に着いた。吐  
 き出すやうに流れ出した数多の乗客は、列をなしてぞろ／＼と、ブラッ  
 トホームに腰から下のひよ／＼と軽い足を揃へた。改札口の欄に揺ま  
 つて首を伸してゐる出迎人は、一齊に此方に向いて来る是等の人を見落  
 すまいとして、油断のない眼を最も敏捷に働かせてゐる。場内は一切り



混雑して締めき合ふ喧噪の中を、待つ人もない雪枝は唯一人、群衆を押し分けて心もとなげに石段を下りた。

「お嬢様、如何です。参りませう。」

と行成客待の車夫がうるさく附纏ふので、不安らしい眼を四方に配りながら、怖々して電車道の方へ歩いた。

昨日雪の深い越路を出た身が、今日は大地に水を撒いてある都に入つて、まるで夢のやうな気がする。何處を見ても唯眩しいばかりで方角も分らず、未だ宵の口の薄暗く暮れかゝつた空に、ぼつと浮び出たクラブ洗粉の廣告が渦を巻いて白くなつたり赤くなつたりする。其の鮮かな電氣に先づ眼を驚かされた。銀座通に出ると、時ならぬ満艦飾の美しい色彩に、再び肝を冷されて恍然と橋の袂に佇んだ。

「あゝ、彼れが新橋の停車場！」

彼處で私の父が捕へられたのである。見ず知らずの旅人とはいひ、敵

百人の都人に腰に繩の恥かしい我身を眺められた時、父はどんな氣持がしたらうあゝいやだゝ。

雪枝は感慨深さうに二三度振り返つて見た。束髪は亂れて、汽車の疲れに蒼醒めた顔が、白い瓦斯の光に一入凄味を帯びた。紫紺地の袖の長いコートの肩はなよやかに落ちて、絨織のオベラバックを提げた手先が、ぶる／＼と慄へてゐる。

「早く電車に乗りませう！」

と思ひながら慌立しげに往き過ぎる俣や電車の影に眼を奪はれて、幾度か行き迷つた。

家を出た跡の管ならぬ騒動や、家内中の人の甚だしい心配を思ひ浮べると、一々針で刺されるやうに胸に響いて、最う堪らなく苦しい。雖然あゝ悪いことをした、濟まぬことをした、と云ふ悔悟の念の湧く中を逃つて、少くとも自分の目的——餘義なくされた最後の決心を、今眼のあ



たり現實にして、寧ろ冒險的の目的の一部分を遂げた今日の小さい誇りと、それに伴ふ一種の反抗心の満足とが、先づ頭を擡げて、此度の女らしからぬ我が行為を反省せしめる餘地を與へなかつた。

自分の行為は元より悪いに極まつてゐる、其の悪いと云ふことを知りつゝ、敢て實行した心の苦痛は如何程であらう、あゝ誰も知らぬ。私は永久に此の苦痛を自分一人の胸に秘めて、靜かに悲しい過去の夢として自ら葬り去らねばならぬのだ。

斯う思ひながら雪枝は往きつ戻りつ、糖て橋を渡つて博品館の前に立つた。冷たい風は毛皮のネクレットを通して、頸の邊りへ颯と剃刀のやうに染み込む。赤い灯や青い灯を點けた明るい電車が幾臺もなく續いて、停まるかと思ふと直にチリンチリンと動き出す。慣れぬことなので迂路迂路してゐたが、それでも何うやら上野行のボギー車に乗り込んだ。狼狽して腰を落ち着けると、行成眼を刺戟したのは、自分と向ひ合つて十七

八の盛装した令嬢が、二十四五の若紳士と並んで、何か話しながら時々眞白の可愛らしい齒を出しては笑ふ……宛然雛の夫婦でも見るやうな男女の連であつた。頭髮のピンから下駄の鼻緒まで夫となく見盡して、これが東京の令嬢風か、否新婚のマダム振かど、我にもなく見惚れて了つた。と同時に心の底に潜んだ遺る瀨ない悲哀が、轟々と胸を衝て出る。

『捨てられたる女よ！』

あゝ私は戀しい人には捨てられ、遂に故郷にまで捨てられた憐れな女である。自分に何の犯した罪もなく此の報いを受ける——それも矢張り父の罪ゆゑではないか……然う思ふと涙は潮の如くに迫つて來た。

電車は上野へ着いた。雪枝はハツとして下車した。賑かな都の夜の光景は、田舎少女の單純な眼を唯驚かすばかりであつた。

『参りませう、参りませう！』  
と又車夫が聲をかける。



「あの、七軒町まで行いて下さい！」  
辛つこの思で氣味悪さうに命じた。

俣は池の端へ出て、同じ體裁に並んだ待合の前を護謨輪の音もなく、  
仄暗い提燈を下げて走つた。折々粹な三味線の音めが洩れて、客の騒ぐ  
酔拂つた胴魔聲や、雛妓のキャツ／＼と叫ぶ金切聲が聞えた。世の不景氣  
を知らずに巫山戯てゐる其様光景には氣も止めず、雪枝は不忍池畔から  
吹きつける鋭い風を微に幌の中に避けて、首を縮めながら今行く叔母の  
家を想像して見た。

叔母といふのは最う彼是十年餘も前に別れた人で、雪枝の母とは腹違  
ひの妹である。年頃になつて東京へ出てから勉強して、其の後少時女教  
師をしてゐたが、間もなく今の清藤と云ふ人に嫁附いた。平素は滅多と  
音信もしないけれども、時折の便りに依つて、唯幸福らしい家庭だと察  
してゐた。今突然に自分が訪ねて行つたら、定めてお轉婆な娘であると、

頭から刎ねつけられるであらう！ 然う思ひながら門並の軒燈に注意し  
て行くと、唯ある門の前に筆太に名前を書いた丸い街燈が出てゐた。

「此處です、此處です、降りして下さい！」

俣から降りると雪枝は胸がわく／＼して來た。で、怖さうに潜りを開  
けると、蹴立たましく鈴が鳴る。其の拍子に眞黒の大きな犬が出て來て頸  
に吠えついた。

「叱ッ、叱ッ！」

と半巾で打つ眞似をしながら、足音を忍ばせて飛石を傳つた。夜目に  
もそれと知らるゝ梅の香りがぶーんと鼻に來る。門内は森として静かで  
あつた。見上ぐれば白梅の大木が五六本、薄りと半開きの番を見せて、宵  
闇の空に淡く聳え立つてゐる。低い生垣に沿ふて紅の山茶花の散りかゝ  
るのも、靡げながらに認められた。

人の氣勢に明りのさした正面の障子がすうつと開く。



「何誰ですか？」

殊更に大きな聲を出して、眼鏡をかけた十八九の頑丈さうな書生がぬつと顔を出した。雪枝は小さく縮込まつて、

「富山から参りました秋岡と申します、叔母さんはお出でになりますでせうか？」

と丁寧に腰を屈めた。

「ハア、一寸お待ち下さい。」

書生はきよくしなから奥へ引込んで行つた。努めて頭腦を冷静にして、雪枝は身動きもせず立竦んだ。五燭の電燈がぼんやりと淋しい影を照した。少時すると書生の後から叔母の政子が出て来て、不思議さうに雪枝を見守つた。幼顔の見覚えある清しい眼元や、可愛らしい口元に凝と眼を止めて、さも吃驚したやうに、

「貴方は雪枝さんでせう……」と大きな眼を睜つた。

「ハイ、叔母さん……久らくでございます。」

悄然首垂れると、

「まあ何うして来ました？、餘り突然ぢやありませんか、さあ兎に角お入りなさい！」

不意に驚かされた政子は、仔細ありげな雪枝の舉動を怪しみながら自分の居室に導いた。三室ばかり通つて十燭ランプの垂下つた六疊へ入ると、政子は机の前で何か認めて居たらしく、白紙の上に墨の附いた筆が轉がつて、細く蚯蚓が流れてゐた。瀬戸の大きな火鉢にカン／＼と火が起つて、鐵瓶が好い音を立てゝゐる。政子は友禪の坐蒲團を鞠めて、

「さあお敷きなさい、嘸寒かつたでせう……」

と先づそれから一通りの挨拶が了る。

「今着いたばかりですか、でお連れは？」と訊く。

「私一人で参りましたのでございます。」



耳まで紅くして俯向いた。政子は頷いて、  
 『何か事情があるのでせうが、能くまあ其様に奮發が出来ましたね。』  
 哀憐の情と一種の侮蔑の色が鋭い瞳に動いて、冷かに雪枝の面影をち  
 ろりと凝視めた。  
 此様場合でも決して慣々しく打解けないのが、虚榮心の強い政子の性  
 癖である。で鹿爪らしく其の不心得を詰じつてゐたが、直ぐ書生に命じ  
 て雪枝の家へ電報を打たせた。

主人の清藤亨は元官界に身を投じてゐたが、今は退いて専ら教育學の著  
 述に従事してゐる。雪枝の來た晩は丁度不在で、歸宅つたのが十一時近  
 くであつた。四十五六の肥つた、脊の高い、如何にも體格の確りした男で  
 ある。落着き拂つて何事にも騒がぬ態度からして、既に教育家の威信は  
 十分にある。小さくてまん圓い眼が鋭く光を持つて、二筋三筋白い毛の

交つた眉の下に凝と据つてゐる。此の眼に價值があるのだと、政子は常  
 に誇りとしてゐるのである。

清藤は二階の書齋に通つて洋服を脱ぎながら、政子から雪枝の話を聞  
 いて、  
 『兎に角當分家に置いてやつたら好からう！』  
 と鷹揚に答へた。

『御厄介でございますけれど、何卒少時のところお願い申上げます。早  
 速國の方へ交渉致しまして何とか處置をつけますから。』

『然し若い娘のことだから餘り喧しく責めない方が可い。何か容易なら  
 ん事情があるのだらう。』

『何うも然うらしいのでございますよ。事情は略と聞きましたが、唯學  
 校へ入りたいたいのが目的ださうでございます。雖然私は何か其の他に理由  
 があるのだらうと思つて居りますの、何しろ餘程堅い決心をして参つたも



のど見えまして、先刻から色々と申して見ましたが、何うしても是限り  
歸らないと申すのでございます。」

襦袢一枚になつたのを見て、政子は後から伊勢崎の緋の重ねを着せ掛  
ける。清藤は靴下を一つ宛投り出して、

「國では學校へ入つてゐなかつたのか？」

と白縮緬をぐる／＼巻きにして、鼠地に獅子の狂ひ狂つてゐる模様  
のメリンスの大きな坐蒲團の上へ、どしんと胡坐を掻いた。

「否、來年女學校を卒業になる筈なんですが、昔氣質の祖母さんが反對

なので、それが爲に母親と始終衝突するんださうでございます。で、此  
地の師範學校へでも入學つて、結局女教師になつて獨立したいやうな口  
吻なのでございますよ。何ですか非常に悲觀致しましてね。」

政子は小さいリーダー卷の、割合に若々しく結つてある髪を一寸氣にし  
ながら、バクリ／＼と煙草を噓かす夫の煙さうな顔を見た。

「獨立か？」と苦笑して、「何うも少し物の解る女は、二言目に獨立を叫ぶ  
ので困つたもんだね。ま、貴女から能く利害を説いて訊かすが可い。自  
分にも一度は其麼空想を描いた記憶があらうから……」

と交せつ返しにかゝる。政子はさよふりとするど、

「最う寝たか？」と訊く。

「否、疲れてるだらうから早く寝む方が可いと申しましたけれど、母の  
許へ詫状をやるとか云つて、何だか頻と書いてをりますの。」

と寒さうに銘仙の襟を掻き合はせた。

「では一寸逢つて見やう……」と云ふ。

二人は二階を下りた。政子の居室の隣りの三疊へ入つて、雪枝は片手  
に筆を握つた儘、机の上に突伏してゐた。二分芯の臺洋燈が深い崩れた髪  
と、興奮した紅い顔の半面を斜に照らしてゐる。

「雪枝さん！」



「ハイ。」

ハッとして泣き腫らした血の滲んだ眼を向けた。

「手紙は明日にして此方へ被成い……」

「ハイ。」

素直に立つて、襖の外に手をついて優雅に頭を下げると、清藤は例の小  
さい据つた眼で凝と睨んで、

「さあ何卒遠慮なく此方へ……」

と手づから坐蒲團を火鉢の前に引寄せた。

「今一寸妻から聞いたが、今度は非常の決心ださうですな。家も何しろ  
貧乏世帯であるから、十分の御保護も出来ないが、まあ心易くお出でな  
さい。」と穩かに云ふ。

「ハイ、ありがたうございます。突然に上りまして、何とも相済みませ  
ん。」

顔を見られぬやうに、一生懸命に俯向いてゐる。

「いろいろ事情はあるだらうが、何事も靜かに能く考へた上でせんとな。」

「ハイ。」

「まあ今夜はゆつくりお寝みなさい。」

「ありがたうございます。」

雪枝は清藤の言葉少なにして、然かも打解けた優しい態度を見て、心か  
ら嬉しいと思つた。生れて初めて他人の家に接して、寧ろ不思議に思ふ  
位、心弱い少女の胸に染々有難く感じた。却て幾らか血を分けた叔母の  
方が、義理ある中のやうに萬事氣がおけてならなかつた。

兎も角もこれで雪枝は當分清藤の家に身を寄せることになつたのであ



る。政子とても斯う自分を使つて遙々來られて見れば、假令邪推すれば出來る疑惑はあらうとも、多少は覺えてゐる秋岡の家庭の狀態などを思ひ出して見ると、又同情する點は十分にあるので、娘の様に可愛く思つた。雖然政子は稍高度の教育を受けて、悉ひに偏頗な近代思想に觸れた最も自我心の強い女性である。自分の品位を保つ爲、尊權を犯さぬ爲には、徒らに感情に支配さるゝやうな女ではない。だから雪枝をば心で可愛いと思つても狎々しく表面には現さぬ。で最も慎重の態度を取つて――

何方か云ば、理窟澤山の豪がつた長い手紙を義姉の許に送つた。國からは問もなく返答が來た。地方人の習慣として、時候の挨拶から平素の無音の詫びからを諱々しく述べて、さて此度は突然雪枝が上つた粗忽から、父が不在中で何事も私の不注意であつたといふ事など、謙遜深く幾行りも書いてある。で、これには色々込入つた事情もあるのであるから、何卒雪枝の此度の所爲に就いては深くお咎め下さらず、不感な娘と

思召して今後は何分にも宜しく頼む。學校へ入りたいとなら、十分と云ふ譯にも行かぬが學費も送らう、雖然最う年頃のことであるから成らうことなら相當の人に嫁附けて貰ひたい、私の方ではそれを一番悦ぶのである。兎もあれお手許に任せるから十分に監督を願ふ。私が早速上京して直接親しくお頼みしたのであるが、實は七箇月の身重で何うすることも出來ぬ、残念ながら失禮します。お目には懸らないが何卒御主人にも宜しくお頼み申上げる、ご自分の義妹に對することも思はれぬ程、甚く卑下つた態度で丁寧に認めてあつた。然しそれは無論男の人の代筆であつた。そして粗末ながらほんの御禮心にお目に懸ける、と云つて、特に上等の品を注文して拵へさせたと云ふ『蒲鋒』が二箱小包で到來した。情に激し易い政子は幾度も此の手紙を讀んで、流石に涙を零した。

『阿母さんは七箇月だと云ふのに、貴女はまあ能く振り捨て、出て來ましたね。お父さんは未だ當分お歸りなさらないんですか？』



雪枝は『お父さん』と云ふ言葉に思はず體中の毛が栗立つた。  
 『ハイ、始終旅行勝ちでございますから……』  
 と思ひ切つて辛とこれだけ答へた。成程然う云へば母のお腹の膨れて  
 ゐたことに氣が附く。父の不在中に七箇月の重い身を抱へてゐるさへあ  
 るに、今又力にする私に去られて、彼喧しやの姑を頂いて嘸心細いだら  
 う、寂しい淋しい家庭が一層暗く冷たくあつたらう、と少時は顔を得上  
 げなかつた。深い事情を知らぬ政子は、唯自分の突飛な、深窓に育つた  
 娘としては餘りに大膽な今度の行爲を恥ぢてる者と見て、別に怪しみも  
 しなかつた。

で、國からは平素着や何か二行李も取寄せた。當分の小遣ひや、學費  
 の幾分をも送つて貰つた。それから政子は四五日奔走してお茶の水の高  
 等女學校へ入學する手續きを済まして呉れた。然うしておいて毎日それ  
 とはなしに國元の事情といふのを委しく聞き糺さうと努めた。

雪枝は單に學問をしたいのが目的で上京したと云つたのは、叔母の前  
 を飾る一時の逃げ言葉に過ぎなかつた。學校へ入りたいたと云ふことは無  
 論結局の目的に相違はないが、それよりも先きに第一の目的がある一大  
 秘密の或物があつた。何時かは現れべき其の秘め事を叔母夫婦に飽く迄  
 も隠匿しやうと企てゝゐる。聰明といへども十八の少女の思慮はなほ淺  
 いものであつた。

雪枝の家は富山市でも有名な資産家であつた。元は盛に賣藥商を營ん  
 で諸國へ多くの行商人も出してゐるし、宛然旭の昇るやうに榮えたが、父  
 の清藏が偶と持前の投機氣を起してから様々の事業に手を出して、それ  
 が悉く失敗に終つた。で、昔氣質の兩親からは苛められるし、少しは暴  
 腹の所へ端なくも氣紛れに金貨業を始めた。東京で云ふ高利貸程に恐ろ  
 しい惨忍なものではないが、唯幾らか低利であると云ふだけで、性質に



於ては毫もかはらなかつた。寧ろ土地が狭いだけ餘計に人目にもつく所から散々に攻撃を受けた。それでも構はず動かぬ處へはすん／＼執達吏を向けることを敢て躊躇しなかつた。そして土蔵には差押へをした中の目星しい道具や衣類が絶えず殖えて行つた。然しながら清蔵は大腹であつた丈に千圓以下の金は出さなかつた。雖然一面非常に俠氣を持てゐたから、吝なことは云はずに／＼無抵當で貸附けたのが抑も破滅の原因であつた。斯くて止さう／＼と思ひながら損耗して損耗して損り抜いた揚句、偶々悪漢の仲間へ誘はれた。唯さへ裁判沙汰の多い事を苦にして居た老母や妻の藤尾は、日毎額を集めて、其の救済策を講じたが遂に徒勞であつた。清蔵は一昨年あたりから多く旅行勝ちで、早くも三月か四月目、何うかすると半年目位で歸宅つて来る。大阪に居るかと思へば東京にある、又静岡に行く、絶えず宿所は一定しない、そして國へ歸れば家の者に曖昧な出鱈目を聞かせた。ところが僅一箇月ばかり家にゐる間に往

復する書翰や其の他の行動について、家人に眉を翹めさする様な事實は度々であつた。枝雪は或時つか／＼と父の居室へ入ると、折柄父は手紙を書いて封書裏に變な匿名をしたゐたことを見た。それを素早く傍へ隠されて、何となく不安な、一種の恐怖心を喚起したこともある。父の隠險な相は次第に憂鬱になつて、凹んだ眼はいよ／＼凹んで底氣味悪く光るやうになつたのも、強ち破産の所爲ばかりとも思はれぬ程、神経過敏な雪枝に直覺的に感じさせた。又家にさへ居れば一室に閉ぢ籠つて何か考へ事をしである——それが雪枝の眼には何うしても悪事の作戦計畫をやつてゐるとやうに痛切に映じた。祖父母も語らず母も云はず、霜枯れの風に咽ぶやうな陰氣な家内は益陰氣になつて、黒い雲に包まれた。そののみならず祖母と母とは所謂嫁姑の衝突で、元から面白くない家庭であつた。それが一層一家の陰鬱を増さしめた。で、唯何物かゞ澄ん



であるやうに暗示されてゐる家内の者は、長い沈黙の中に纏て来るべき一大破裂の悲劇を待つかの如く、戦々兢兢として日を送つた。

悲劇は日毎に近づいた。昨年の夏清藏は久し振りで家に歸つてゐた。

「此度は二三箇月家にゐるよ。」  
と云つて子供達を珍らしく芝居などへ連れて行つた。雪枝も兄も弟や妹も學校が休暇で、毎日父と顔を合はせてゐたが、偶歸る父を左程に悦ぶ

でもなく、甘へるどころか、何となく唯可厭な氣がして、心から親しうとはしなかつた。中でも雪枝は一番父の寵愛兒であつたから、比較的

多く父に接近する方であつたが、それでも普通の親子としての情愛——

父を慕ふと云ふやうな情は或疑惑の幕に遮られて我れから隔てをつけた。

祖父は間がな隙がな清藏を居室へ呼んで、屈託さうに眞白の願髪を引張りながら何やら小聲で訊いてゐた。其の都度清藏は一々頷いて言葉優

しく年老を慰勞はつた。

「萬一の時にや私は最う生きてゐられんぢやて！」と聲を潤ませると、

「否えお父さん、其様ことはありません、大丈夫です。」と慌て、打消した。此の會話を雪枝は端なくも換越しに立聞きして、

「あゝ矢張り何か祕密があるのだな。」と懐ひ上つた。

三

九月に入つて學校が始まると、雪枝等は皆出掛けて小さいの許り残つてゐた。其の不在に何處からか偶と電報が來た。すると清藏は忽ち色を變へた。

「急用だ。直ぐ東京へ行く……」

斯う云つて取るものも取りあへず抱一つ抱へて、狼狽と風のやうに飛



んで行つた。

家の者は煙に巻かれたやうに唯呆れた顔を見合はせる許りであつた、各自の胸の中には忽ち恐ろしい稲妻の閃光があつた。

悲劇は遂に來たのである。四五日経つと、清蔵は新橋驛で突然捕縛された通知があつた。其の拍子に祖父は蒲團を引被つて寝て了つた、かと思ふと家人の眼を偷んで寢床の中で美事に短刀で自殺した。其處へ警察官がどやどやとやつて來て家宅搜索を始めた。家族を残らず一室に押し込めて刑事は見張りをする、そして藤尾に案内させながら土蔵の床下まで調べた。それから書類と云ふ書類に皆眼を通して疑はしい物は悉く没収した。最後に祖父の死骸の下から一通の書置を引出した。

「何だ、何だ？」

と一人の刑事はそれを開いて遠慮なく讀み上げた。要領は略と斯うである。

……今回の災厄、回顧すれば今更家人に何とも面目がない。家人は今度の事件に付て嘸驚くであらう。然しこれは決して偶然の出来事では無いのだ。私は今死に瀕して悉く白状する。五十幾年の往昔、村役場に村長を勤めた折、不圖した出来心から大崎勘兵衛等と共に謀して、道ならぬ悪事を行った。其の事發親して勘兵衛等は残らず縛についた。獨り自分には名譽に恥ぢ、親戚其の他の誇りを恐れ、連累者の貧苦に附け込んで遺族の扶養を引請けた、然うして私は罪から免れたのである。自分一人の爲に斯くも多くの犠牲者を拵へた。然し乍ら他の者は同じ罪惡の下に幽囚の身となつて、此の世から地獄の苦役に服してゐるにも拘らず、張本人たる自分獨りが世を偽り人を欺き、今日迄生永らへた其の苦痛は如何であらう！三年間眼に見ゆる獄屋の激しい管に鞭たるゝよりも、五十年來一時刻の絶え間なく眼に見えぬ良心の苛責に苦しんで苦しんで苦しみ抜いた其の辛さと云つたらない。斯かる破廉恥の罪に罪を重ねた



私の血を受けて生れた一人息子の清蔵！ ああ清蔵は遂に私の身代りに立って呉れたのだ。清蔵！ 申譯がない、許して呉れ！ 私は謝罪する——命に代へて此の通り謝罪する……  
處々に涙の跡の滲んだ薄墨のひよろひよろした文字は、確に祖父の筆跡であつた。

市中の新聞は仰々しく秋岡家の惨事を暴露して、市から村へと響き渡つた。子供等は毎日學校から泣いて歸つた。雪枝は餘りの不面目さに女學校を退いて了つた。すると氣の小さい兄までが中學を休んで些とも外へ出なくなつた。  
清蔵の犯罪は幾つもあつたが、残らず破廉恥罪であつた。無論連累者の多いと云ふことは、餘りに複雑した事件であるので解つた。然しながら豫審の調べは案外早く済んで、二度目の公判で最う罪が定まつた。出來得るだけの運動費を使つたが、それでも新刑法に依つて二箇年の懲役

に處せられたのである。  
それを聞いた時、長男は力を落して男泣きに泣いた。それから勉強も爲す態々として閉ぢ籠つてゐたが、秋の末から肋膜炎を患ひ出して、霜月の半に病院で死んで了つた。間もなく三ツになる末の妹も急病で跡を追つた。  
暗い家は斯くして益暗くなつた。父の非業に祖父の自殺、ついで長男と末子の病死さへあるに、魔の手はなほ飽足らず此の憐れむべき一家を塵しにしやうとした。

雪枝には兼て相愛の人があつた、鈴木隆といふ醫學士で、此の春親と親との間で婚約が結ばれた。それが突然破談を申込んで來たのである。家と家とは何等かの縁ついで、滿更の他人同士ではなかつたが、兎も角隆が雪枝に對する戀の熱度は非常のものであつたのだ。一寸雪枝が



風でも引かう者なら、毎日附つきりに来てゐて他の病家から時々批難を蒙つた。雪枝の方でも少し眼が悪いと云つては行き、頭痛がすると稱しては下女を供さして能く出て行つた。夢見るやうな美しい戀は斯うして益お互の心に終生忘れられぬ深い印象を残した。十一月に結婚式を舉げるのが待遠しさに、隆は幾度か診察室で人知れず手を握つて、婚のやうに燃ゆる戀を囁いたらう。雪枝は其の都度溶けるやうな嬉しさと、未來の樂しさに満足しながら、取かしい一方で眞紅になつて逃げ歸つた。其の戀人から雪枝は捨てられたのであつた。雪枝の身に取つては父が悲惨の罪業よりも、此の方が遙に打撃であつた。で、幾夜か泣いて、眼の潰れる程泣き明した揚句、せめて此の事を東京へ行つて父に話し、自分は生涯汚れた血を受けた罪人の子として獨立をしやう、祖父から父へ、父から自分等に送られた此の汚れた血をなほ且つ廣く社會に及ぼして、汚れた種族を繁殖さすに忍びない、あゝ私は決して人の妻にはなら

ぬ、妹も弟も皆獨身で終るが可い、と眞夜中偶と蒲團の上に坐り直して、生甲斐もない前途の儂なさを染々感じたのは毎夜のことであつた。結局此様事が家出の原因であつたのである。だから東京へ來れば第一に父に面會するのが目的であつた。雖然叔母とはいへど幼いから別れてゐたので、殆ど他人同様の氣がする。殊に叔母の方から四角四面に出られては、何うして此の恥かしい一家の事情から、我が身の恥辱を語られやう、雪枝は毎日切通しを上つてお茶の水へ通ふ道すがら、何うして父に逢ひに行かうかと、それ許り考へて歩いた。

二月末の寒い風は巷に眞白の砂塵を立てた。空は美しく藍色に晴れ渡つて、四時過ぎの日光は斜に大地に流れた。人通りの繁しい本郷街道を大概勤め人や學生で満員になつた電車が威勢よく走る。雪枝は枯槁色の袴に黄色い銘仙の派出な羽織を着て、踵の細く高い靴の歩調を早めながら、毎時も今頃は雑沓する街の光景に餘り氣も留めず、岩崎の横から石



垣に沿うて、毎日見合はす角の交番の巡査と又顔を合はして池の端へ出た。強い風は袴の装を遠慮なくバツと煽る。小肥りの脊の低い怖い眼色をした太田といふ巡査が、此の間戸籍調査に来てから雪枝を見ると自分から屹度一寸頭を下げるやうになつた。で、今雪枝が通ると、マガレンツトの頸筋に鐵お納戸のリボンを持つたハイカラな容姿を、後から凝と見送つて微笑を洩らした。

「雪枝さんレ 雪枝さん！」

不意に呼びかけた者がある。東京の街で未だ男の人から聲をかけられる知合はないが、と思ふ瞬間に振り向いた。

「やあ、久らく。全然見違ひました。」

と薄氣味悪く笑つて突立たのは思ひ掛ない郷里の人、而も兼ねて雪枝を慕うてゐた横山金次と云つて、元は自分の家に使つてゐた行商人の一人息子であつた。

「まあ、何うして此地へ？」  
 雪枝は慄とした。そして見慣れぬ金次の洒落た風采を不思議さうに眺めた。金次はピカ／＼、光る絲織の着物に細い千筋の縞の羽織を着て、首にちよいと焦茶色の絞り模様の半巾を巻きつけたものだ。之が國に居ると目倉縞の筒袖を着て、毎日廣貫堂へ製薬に通ふ金次かと思ふと、雪枝は意外の上にも意外の感に打たれた。  
 「實は貴女に逢ひに来たのです。」  
 金次は片手を懐に入れて、襟つたいやうな眼をしてゐる。

嫌に落着いた男の舉動を見ると、さては、と雪枝は一種の不安が起つた。

「貴女の此度の決心にや實際驚きました、然し私は同情します。」  
 「私、此様處でお話は出来ませんから……」



往來の人が異様の眼をするので、雪枝は氣が氣でない。  
「私は是非貴女にお話があつて忙しい中を、態々斯うして出て来たので  
す。實は昨日も一昨日も此處へ来てゐましたが見逸れて了つたんです。  
失禮ですがこれから私の宿へ迄一寸来て下さいませんか？」  
「私、今伺つてる譯には参りません。叔母に断らなきや自由に外出は出  
来ませんの。」

「何、少時で可いんです。では一寸其處等で晚餐でもやりませう。」

「飛んでもないこと。貴方は餘り失禮な方よ。」

早々で行きかけると傍から尾いて来て、

「雪枝さん、東京へ来れば誰も知らないと思つて、其様大きい顔をして  
歩いて駄目ですよ。貴女のお父様のお蔭で私等は如何ほどの迷惑をし  
たか知つてゐますか？」

弱點に附け込んで、そろ／＼奥の手を出し初めた。

「私、其様ことは知りません！」

耳を抑へるやうにして足早に歩いた。最う清藤の前に来てゐる。

「雪枝さん、貴女は何うしても私の話を訊いて呉れませんか？」

「だつて貴方は私を脅喝してゐるんですもの、父は父、子は子よ。父に如  
何罪惡があつたところで、子には何の關係もないぢやありませんか。私  
東京へ来たのは勉強する爲で、別に逃げて来たんぢやありません。其様  
ことを云つて威かしたりするのは男として餘り卑怯よ。最う私家へ入る  
から、貴方此儘歸つて頂戴な。」

高く響く心臓の鼓動を凝と抑へて、雪枝は門の潜りに手をかけた。金  
次は慌て、

「誤解しちア不可ません、是程に貴女を慕つてる私が、何で脅喝なんか  
するもんですか。では雪枝さん、今日はこれで歸りますが又お目に懸り  
ますよ。」



と云つて屹と嘘を据るた。雪枝は急いで門の中へ入つた。すると、金次は茫然とした顔をしてぶら／＼と待合の方へ歩いて行つた。二十五六の何う見ても商人風ではあるが、越中富山の薬やとしては餘りに氣障である。

四

雪枝は例の如く政子の室へ顔を出して、

「只今！」と手を突くと、

「お國から手紙が来てゐますよ。」

と机の前に坐つて何か考へてゐた政子は、本箱の上から封書を取つて渡す。そしてちろりと雪枝を見る。

「は、何うも有難うございます。」

騒ぐ心を静めやうと、手紙を受取るが否や下らうとすると、

「急と書いてありますから、直ぐ此處で読んで御覽なさい。」と云ふ。

「ハイ。」

少し忸怩してゐる。

「今朝貴女が出て間もなく来たんですから早く御覽なさい。」

と雪枝の素振りを見守つて催促する。癖毛が額にハラ／＼と亂れて、眼色が険しかつた。雪枝は手紙を持つた儘肩で呼吸をしてゐる。

「何うかしたのですか？」

「いゝえ。」

ピクリとした。

「阿母さんから来た手紙を私の前で見るのが別に苦しいでせう。」

「ハイ。」

雪枝は爲方なしに其處へ坐つて、慄ひながら封を切つた。



手紙には意外のことが書いてあつた。それは昨日葉鳴から久し振りで手紙が来たといふことである。父の音信は獄則として二箇月に一度しか見られない。で、兎に角健康であるといふので一同安心はしたが、お前の縁談は其の後如何したか、私が居なくとも若し先方で承知して呉れたら、何卒内々假祝言をさして貰ひたい、然うすれば私も大に安心するから、何れも知らぬお父様は此様ことを云つて寄越した。然しながら何分にも父は斯う云ふ淺猿しい身の上になつたから、萬一故障が起りはしないかと、其許り心配になる……と云ふ事が書いてあつた。であるからお前が面會に行つた時には何卒、祖父さんの自殺も、兄と妹の病死も、鈴木醫學士に断られたことも話して呉れるな、話せば屹度力を落して頓死でもするだらうと思ふから、其處は好い様に頼む……と何やら讀んでゐても涙の出るやうなことがばかりであつた。そして五圓の爲替が二枚出た。最後の二仲に、此の頃は世間を憚り一人残つてゐて呉れた下女にも暇を

やつた。家は益淋しくなる許りで、今年の大雪に身重の體は手足の底も一入思ひやられるだらう……と書き添へてあつた。  
 『お金を送つて来たんですか？』  
 と政子は直ぐ爲替に眼をつけた。雪枝はハツとして、  
 『ハイ。』と幽に答へたきり、涙含んでゐる。金は直接送らぬ約束であつたのに……と政子は不快な顔をして、  
 『急と云ふのは何でした？』と訊く。  
 『別に……』と云ひ澁ると、  
 『叔母さんに何でも打明けて下さらなきやあ困りますよ。』と險を含んでゐる。

『ハイ、それは最う……』

『一寸拜見！』

手を出されて雪枝は甚く狼狽した。



「あの、百済ないことばかり書いてございますの。私が居なくなつてからは急に淋しくつて為様がないつて……」

ふる／＼頭ひながら手紙を封筒に納めると、政子は意地悪く、

「見たつて可いでせう、拜見！」と云ふ。

見せなければ即座に政子の感情を害するとは知りつゝ、然かも此の手紙は見せる譯に行かぬ。さらでも政子に内緒で十圓の金を送つて貰つたではないか。今は唯何うして政子の機嫌を直さうかと、雪枝は咄嗟の間に何の思案の出やうもなく、眼も眩むばかり激しい感情に頭腦を掻き亂された。

「お厭なら拜見しなくつても好うござんす。」

と政子は冷たい笑ひを浮べた。

「厭なんて其様ことはございませんけれど。」

思はず知らずハラ／＼と涙を溢した。

「何故泣くんです、え、雪枝さん、何うしたの？ お母さんから何か悲しいことを云つて来たんですか？」

と今度は優しく訊ねる。

「いゝえ、國の音信を聞くにつひ種々なことを思ひ出して……」

最上座に堪へ難げに立ち掛けると、政子は不思議さうにきよろ／＼して、

「で其のお金は何う云ふお金？」

と云ふ。で、此の場合思ひ切つたやうに、

「あの、叔母さんにお預け致しておきます。」

と答へた。

「私に黙つてお母さんの許へ餘りお強請しちや不可ませんよ。」と少しは和げて来た。

平素餘分の小遣は渡されてないので、一々叔母に云ひ難い買物や、女



の身の眼に見えぬ必要の物がある、それと父に逢ひに行く時の旅費などの用意であつた金は、斯くして又叔母に捲上げらるべく餘儀なき仕置となつた。  
硝子戸越しに櫻の花のハラ／＼と散る薄ら寒い夕暮で、折から門の鈴が鳴つた。清藤が歸つたらしい靴音である。其の拍子に雪枝は書齋に引込んだ。

雪枝は其の夜母に送る長い返事を書いた。今後は成るべく手紙に父様のことは書かないで頂たい、何れ其の中面會に行くから、そしたら又委しい様子を知らせると云ふと、小さい妹や弟の前では決してお父様の話などしないやうになど、いろ／＼と細かい事迄認めだが、母に此の上の心配をさせるに憚びないので、横山金次に強迫されたことも、十圓の金が端なくも叔母に見附かつて、預かられた事も遂に洩らさなかつた。

封筒に上書をして、さて筆を投げる時、机の傍の三尺の床に、昨夕活けた水仙の清しげな姿を凝と眺めながら、染々旅の辛さを感じた。  
何等の興味もなく、唯黒い雲に包まれたやうな郷里の家庭や、何處もなく底冷のする今の叔母の家や、空漠とした果敢ない自分の未来などを考へて見ると、譯もなく悲しくなつて涙ばかり流れる。生ある限り暗い影が附纏つて、自然に闇へ導かれて行くやうな悲惨な最後を、今から丁度示されてゐるやうに思はれて爲方がない。何故私は然うした忌はしい運命を擔つて生れて來たらう、と考へるとつくづく親と名のつく者が怨めしくなる。浮世へ出して貰つたといふことは幸福なのかは知らないが、斯ういふ苦痛や打撃を與へられるなら生んで欲しくはなかつた。斯かる親は寧ろ矢張り一つの罪惡を犯したと同じだと思ふ。清淨無垢の何も知らぬ子供に、最初から社會の暗黒面許りを見せつけられては、實際親を有難い者だと思ふ筈はない。



然しながら又一方から考へて見ると、親の罪惡が子に報いて來るといふ世のありふれた俗語が氣に喰はぬ。否それが抑解らないのだ。自分は何うしても親は親、子は子と何處までも別つこのものであると思はれる。親が假令善人であらうが惡人であらうが、又は金持であらうと貧乏であらうと、それで、其の子の一生を左右されべきものではない。或時代まで親の養育を受ければ、後は一人一人其の子が造り出す運命に依つて、各別々に我思ふ所に進んで行くものではあるまいか？ 親が貧乏人であつたからとて、其の子も必ず一生貧乏するとも限らないし、又親が惡人であつたからとて、必ずしも其の子が惡人になるとは云はれまい……と思つた時偶と現實の我に返つた。

「懲役人の娘！」と誰やら囁くやうな聲がする。

「遺傳だよ、お前の祖父さんからお父様へ、それからお前達に傳はる恐ろしい遺傳だよ。」

心の奥で又此様聲がした。雪枝は机の上に兩手を組んで、ヒタと額を當てた。

「お前は然う云ふ父親の精を受けて來てゐる惡人の娘だから、生涯社會からは斥けられて、眞人間の仲間入りは出來ないよ。生意氣に幾ら自分一人で個人主義を擔ぎ出して見た所で、世間が許さないから爲方がない、黙つて温順しく引込んでお出で！」

斯ういふ冷酷な最後の宣告が犇々と責め寄せて來る。

雪枝は悔し氣に前髪の毛を抉つて、物狂はしく机の前に打倒れた。

斯うなつて來ると、最う勉強どころではない、女が勉強して悉じひの學者になつて見たとてそれが何になる？ 終生身を任する夫といふ者もなく、心を慰むる華かな戀をも知らず、唯學問にばかり凝つて、それで私は一生涯を果して満足して暮されやうか？

雖然二年を經過すれば、犯した罪の責を了へて父は青天白日の身とな



つて歸る。然うすれば私も最早や汚れた人の娘ではない。とは云ふもの、一度牢獄に囚はれの身となつた歴史の汚點は未代に消えぬ。あゝ私は遂に何うしても悪人の娘だ、罪の子だ、脱れやうたつて脱れられない煩らしい葛絛に縛られてゐる淺猿しい女である、と雪枝は胸を抱いて泣き沈んだ。

五

横山金次は東京へ来て迄も、相變らず雪枝に素氣ない態度を見せられて力を落した。如何事をしても旨く説得して國へ連れ歸らねば止まぬ決心で出京したのであるから、其の後は只管雪枝を籠絡する手段方法についてのみ腐心してゐる。徒らに跡を尾け廻したり、強迫がましいことを云つて威嚇したりするのは愚である。雪枝は其様輕卒なことで動くやう

な淺猿な女ではなかつた、と悟つた。猫の子にまでお世辭を振蒔いて諸國へ藥の行商に廻り歩く男程あつて、其様智恵が後ればせながらに出た。そして神田の初音館といふ下宿屋に轉がつて、女中を對手に毎日巫山戯てゐる。國元からは最う二度も、『スグカイレ』の電報に接したが、平氣の平左で澄まあしてゐるのだ。ところが突然親父の義作がやつて來た。『オイ、金次！ 手前は眞實に何う云ふ氣であるのだえ、二百兩といふ金を掴み出して、能くも〜遊びに來よつたな、此の野郎奴！ さ、巾着を出せ！ 巾着を出せ!!』と行成怒鳴り込んだ。足元へ行火を入れて外を通る軽い薄齒の足音や、俣の響きに耳をかしながら、夢現ともなくうつら〜と寝轉んでゐた金次は、好い心持の夢を覺まされて吃驚りした。

『ヤアお父さん！』  
別ね起きると直ぐ、慌て、床の間に置いてあつた小さい金時計を新聞の



下へ隠した。

「何だ、其の時計は！」

素早く眼をつけて義作は新聞の下へ手を入れた。ざらりと金鎖を引出す。半分は白毛の眉の下で、香臭い爛れた眼が恐ろしく光った。

「こりや女持の時計ぢアないか。此様物を買ひよつて何うするか、生意氣な野郎奴！ 馬鹿!! 貴様のやうな奴は最う勘當だ。」

口穢なく罵つて火のやうに怒り飛ばした。

「又勘當ですか、勘當も最う可なり古いもんですね。まあお父さん、然う真向から怒るもんぢやありませんよ。お茶でも上れ。態々入らしつて下さつたんですか、御老體のところを何とも恐入りましたね。何一寸然う云つて斷つて出れば何の事もなかつたのですが、實は急に思ひ立つたものですから、其の何です……何うも相済みません。これより最う動きませんから……何卒御勘辨を願ひます。」

丁度落語家がするやうな身振りで揉手をしながら、斯う云つて態とらしく頭を下げた。其の語調も餘程落語家染みてゐた。

「これより動かないたあ何のことだ。此の阿呆陀羅經奴！」

堅く握つた鐵拳は、今にも金次の美しく分けた頭の上へ落ち掛つてゐる。其處へ女中が茶器を運んで來た。すると義作はジロリと睨めて、

「お茶は最う入らんよつて、彼方へ行つてゐて貰はう！」

と突慥貪に追ひ拂つた。

「何うも甚い猛勢ですな、は、は、は、は、」

親の心を子は知らず、金次は冷笑した。  
「笑つてる奴があるかい！ さあ此時計を何處の女にやる積りか云へ！、  
屹度明神あたりの猫にでも欺されてるんだらう、似多山！」

「私は東京へ來てから未だ藝者遊びなんか爲たことはありませんから、  
偉り様、其の御心配に及びません。」



「そんなら誰にやる了見だ。鎖共で何うしても七八十圓の品物だに、ふん、大切の金を湯水のやうに使ひやがつて……」

「成程女にやるのに相違ありませんよ、然し其様汚れた女ぢやない、雪枝のやうに清い、柳の枝のやうにしをらしいお嬢様に上げるんですよ。」

親父の驚く顔を面白さうに眺めながら、ニヤリと微笑んだ。

義作は不思議さうに金次の飄忽面を見守つて、

「そりや誰のことだい。」と爛れ目を藪腕みにした。

「解つてるでせう。お察しが悪いなあ。雪枝さんに定まつてるぢやありませんか。」

「雪枝さんに？ 先月家を飛び出した秋岡の娘か！ あんな奴に何の爲に金時計をやるんだ！」

「これも矢張り資本ですよお父さん、許して下さい！」

「何の資本だ、馬鹿！ 彼様お轉婆娘に……」

と蹴落して、さて胡坐を掻き直した。

「何の資本つて、何うも困りますな、其處はお年の功で些つとは其何ですよ。」

頭へ手を上げながら、照れ隠しに柱の電鈴を押しに立つた。

「秋岡の爲に太い損をしてゐるのに、其の敵の娘に何故を以て此様高價な品をやるのだ。白痴者奴！」

端なく拳が落ちかけた處へ、女中が上つて来て静と袂を開けた。

「何か菓子と！」と吩咐けて、

「然し父は父、子は子ですからね。悪い奴だつて娘の知つてる譯ぢやないんですよ。雪枝さんに何の罪もありませんから。」

雪枝が先達云つた句調を其の儘擔ぎ出した。

「娘に罪はないかて、然ういふ悪黨の子ぢや、悪役人の娘ぢや、お加之



に大膽にも家を出て逃げ出したやうな手に合はぬ絶物ぢや。」  
 「然う云ふのは酷ですよお父さん！ あれは貴方、鈴木醫學士に破約されたのを口惜しがつて東京へ来たんぢやありませんか。眞實に可哀想な女ですよ。彼の容貌と彼の才能とは富山なんぞで珍らしい娘ですからね。御覽なさい、毎日桔梗色の袴に短靴で、ぐつと斯う氣取つて學校通ひをする風采を。え、眞實にお父さんだつて慄としますせ。然う野暮を極めるもんぢやありません。」

「そして一體何處にゐる？」

「清藤と云つて叔母の家にあるんです。」

「お前は何うして知つてるか？」

「そりや貴方、國で悉皆調べて来たんですもの。」

「お前は逢つたか？」

「逢ひました。以前は兎に角、今の身分になつちや秋岡だつて否應は云

ひますまいからね、ところで本人を確めたのです。」

「何だ、未だ彼娘を貰はうと考へてゐるのか腰拔だな。幾ら元は彼家の若い衆でゐたつて徳役人の娘を貰はれると思ふのか！ 頓智奇奴！」

「だつて何も生涯徳役人ぢやあるまいし、來年の夏になれば歸るぢやありませんか。然うすれば公明正大です。」

「東京のやうに廣い所ならな、人は知るまい、狭い田舎で一度半へ入つたやうな奴の娘と縁組が出来ると思ふか。極道！」

親とはいひながら斯う一々罵られては不愉快で堪まらぬので、金次は嫌な顔をして横を向いた。少時すると、何か思ひ浮べたらしく獨りでクスリと笑つた。

「お父さんは慾を知らない人だな。雪枝さんは私に如何ことを話したか知つてますか？」

「好い加減の出鱈目を云ひ出した。」



「怒を知らん？ そりや貴様のことだ。雪枝が何を云つたのぢや。」  
 と義作は少し乗り出して来る。金次は面白がつて、態ど落着き拂つた。  
 「まあ云ひますまいよ、怒を知らん佛性に話したつて爲方がない。」  
 「何故秘すか。旨い話なら相談にも乗つてやらうと云ふものぢや。」  
 「それ御覽なさい。ではまあ素風でも寒いから何處かで一杯やりながら話すとしませう。」  
 義作は到頭好い鹽梅に釣り込まれて、外へ出る支度をした。

二人は空つ風に吹かれながら錦町から小川町の通りへ出た。最う日暮れ方で街には瓦斯が點いてゐた。

「東京の此の風には堪らんで。」  
 と義作は手前織の瓦斯の着物に、横紬の鐵無地の羽織の上から、重さうな流行後れのトンビを引摺つて、毛皮の附いた高い襟を立てた。

「眞實に御苦勞様でしたね。」

と金次は例の半巾を首に巻いて懐手をしてゐる。義作は時々後へ廻つて息子の服装を訝かしげに眺めた。

「着物迄新調へたな。」

「何あに、お父さん、これは柳原物ですから御安心なさい！ え、と何處へ入りませうか。」

牛肉やの前に一寸立停まつた。

「安い所で可いな、此店は高さうぢやないか？」

と義作は肉やの三階造りを見上げた。硝子障子に花笠電氣が美しく輝いてゐた。

「思切つて上野迄行きませう、お父さんの好きな鯛があります、大阪の丸萬の支店でね、汁の味と來たら無類ですせ。」  
 「鯛も結構ぢやが、まあ肉で可い。」



「鯛だつて何も然う費りやあしませんよ。道が遠いから電車に乗らな  
やなりません。」

と聞いて、義作は急いで手を振つて、

「それぢア止した。電車賃が張る。此の邊の小さい所へ入らう……」

と云つたので金次はふつと噴き出したが、黙つて早々と其處の牛肉屋  
へ入つて了つた。

「あ、これ〜。」

と義作は跡に尾くと、金次は最う梯子段を上つて行つた。下足番は不  
思議さうに義作を見た。下駄を脱ぐと、

「ヤ、御苦勞御苦勞！」

と二足の下駄を結びつけるのを確めて、それから自分も上つて行く。

座敷は可なり込んでゐた。何處か別室をと云ふ譯で、奥の縁ない三疊  
へ導かれた。

「ヤッ。」

二人は黄縞の薄べらな蒲團の上に向ひ合つて坐つた。

「此處等の店で一人前如何位費るかな。」

「うんと飲んでも一圓は費りませんよ。」

「一圓！ ふむ。私は最う多量は飲まんがな。」

「何あに好うござんす、今日のことだからお飲みなさい、會計は無論引  
請けます。は、は、は、」

「は、は、は、何の道同じぢやて。」

子に甘いのは親の常で、義作は大分調子が變つた來てゐる。其の中鍋も  
來た。底落しの火鉢に火を入れて行つた。皿に薄く切つた赤い肉と斜に  
殺いだ葱と、白瀧と、麩が三つ四つとを廣蓋に載せて置いてある。銚子  
に燗の好いのが來た。金次は手際よく煮はじめた。義作は胡坐を掻いて  
頻と室の廻りに垂下つた、一ビール何錢、正宗何錢と云ふ貼紙を讀んで



みた。

「お父さん、如何です。」

金次は銚子を持った。頭の上の十燭電氣は義作の禿げた脳天を遠慮なく照してゐる。

「お前は始終此様處へ來るのかな？」

「滅多に來ません。」

然う云ふ顔を半信半疑の眼で見詰めながら、杯を口へ當てがった。

「ところでお父さん、秋岡には今如何位の資産がありますか？」

「秋岡の資産か、最う澤山はない、何しろ損耗通したもん、投機氣がある中や駄目ぢや。三代で潰れるぢやらう！」

「でも些とはあるでせう？」

「そりや大綱の底ぢやで、ないと云つても私等とは遠ふ、然うさな。」

義作は首を捻つて考へ出した。國の室から書生連の騒ぐ聲が陽氣に洩

れる。

金次は義作が眞面目に胸算用をしてゐるのを面白いと思つた。斯うでも云つて親父を引附けて掛らねば、慾深の爺を籠絡することが出來ぬ、と心で笑つてゐる。

「家作が少しばかりと、銀行の預金のほかに公債の些ともあるかな、と云ひかけて、『イヤ待て、最とあるはずぢや、赤江村の田地は賣つたか知ら。』

と眼を眠つて、一生懸命に人の懐の勘定をしてゐる。

「貸金の方は如何ですか？」

「うんにや、そりや最う望みがなくて、抵當を取らんさかいに駄目ぢや。秋岡と云ふ男は眞實に氣の盛張りした奴にも似合はんな、今度のやうな失敗をやりやあがつて……」



「悪い奴等に欺されたんでせう！」  
 「然うぢや。然しな、彼の親父の遺書に依ると何うも争はれん親子ぢやて、遺傳と云ふもんぢやらう。然う思ふと今の子供等の中にも性質の悪い奴が居るかも知れない。」

「真逆。兎に角我々の家から見れば結構な方ですね。」

「うむ、第一彼祖母さんがうんと持つとつて放さんのぢやもの！」

「は、あ、雪枝さんは皆私に財産の整理をして呉れと云ふんですよ。」

「何？ お前にか、飛んでもない、彼處の家の財産なんか手に付たら悪漢の仲間入りをするやうなものぢや。第一秋岡の不在中に私等が深く干渉する譯に行かん。本家の方で世話を焼いさるぢやらう。」

「然し雪枝さんの云ふのにや、弟は未だ辛つと十六だし、本家あたりから好いやうにされて了ふのは残念だから、と然う云つて頼むんです。だから私の方で雪枝さんを貰つて了つたら、跡は何うでもなるだらうと思

ふです。」と偽つばちを並べる。

「然うは行かん、彼の婆さんが一通りの女かい。何うして〜経一文だつて他人に觸らせやしない。それにお前なんぞに其様ことが出来るもんか。泥棒に鍵を預けたやうなものぢやあは、〜、〜。」

「義作は最う真赤な顔をしてゐる。」

「兎に角雪枝さんを貰つて了つたら如何です？」

「秋岡の財産なんか俺は欲しいと思はん、第一彼見識の高い娘が私の家へ嫁に来る筈がないて。」

「來たら何うします。」

「來たら貰はんこともあるまいが、何にしう國ぢや秋岡のことを人間とは云はん。金貸しを爲た丈でも好い加減憎まれとつたのに、到頭喰ひ込んだのだもの、誰だつて對手に爲やせん。考へて見れば子供等の末が可哀想ぢや。」



「だから、雪枝さん一人でも救つてやつたら可いでせう、お父さんだつて今度こそは些と迷惑をなすつたけれど、元は彼家のお蔭で大分旨い汁を吸つたんでせう。私は近い中に乾度連れて歸ります。」

「歸るもんかよ。」

話は此様事で何等の要領も得ず、だらだらと語つてゐた。二人は十分に酔うて牛肉やを出たのが彼は九時近くであつた。騒々しい神田の街は電車の軋りと、遠くから襲つて来る鋭い夜風と、人の足音とで鳴り渡つた。偶と時計やの前へ出ると、義作は憎乎になつた醉眼を睜つて、

「金次、彼金時計をお前は眞實に雪枝さんにやらうと云ふのか。」と訊いた。

「約束をして丁つたもんですからね。」と笑つて見せる。それも偽なんだ。「金時計一つで秋岡の財産を自由に爲うつて、貴様も大分恐ろしい奴になりよつたな。」

義作は人相の悪い笑ひ方をした。實の處金次は雪枝に焦れてこそ居れ、財産に眼を注げるやうな悪漢ではなかつた。渠は至つて、罪のない男である。自分の戀の満足さへ得れば世間の批評なぞ敢て顧みぬ。だから今になつて見ると、此の間雪枝に強迫がましいことを云つたのを甚く悔いてゐるのである。

六

三月に入ると空の色はいよゝ／＼濃く緑になつて、一體に何となく長閑に春めいて來た。それでも日中は幾らか暖かになつたと感ずる位のもので、朝晩は矢張手洗ひ水に薄氷を張つてゐる。雪枝は第一日曜を期して巢鴨へ出掛けやうと考へた。で、今日は漸うのこと思ひ切つて、叔母の前を植物園へ友達と實地研究に行くこと云ふ風に扮つて、正午過ぎ一人家



を出た。電車は相變らず満員であつたが、高商の制服を着た支那留學生が、雪枝を見ると急いで席を譲つて呉れた。

「何うも済みません。」

會釋して腰を卸すと、男は吊革に垂下つてニヤリと笑つた。無氣味さうに見ることもなく正面に眼を移すと、洋装の少女が瓶の前に立つてる挿書があつて、食事の前に飲めば消化を助け、仕事の後に用ふれば元氣を恢復す、一度口にして忘れられぬはミュンヘンビールのみです、と書いた麥酒會社の廣告があつた。

其の上を見ると水戸觀梅列車の臨時運轉とあつて、五割引の切符は當日限り、三割引のは三日間通用としてある。公私に係はらず現金制度である都の生活の激しいのを雪枝は恐ろしいことに思つた。

江戸川行に乘代へた時に、不思議と又日本服を着た支那の女學生が前に掛てゐた。眼の巨離の遠い、額の廣い、支那人獨特の間の抜けた顔で、

無理に押し潰した底が汚垢で赤白くなつてゐた。黄色い瓦斯縞の袖の短い羽織の上から、黒い毛皮の吝なチクレットを掛けてゐる。レースを括つけた白い縞縞の筒袖の上から、人形の改良服の袖のやうに紅入友禪でヒダを取つたのを二重に着て、真中から赤黒い如何にも無格好な女らしくない手がニユーと出てゐた。雪枝は疑と瞳を凝らして見てゐると、先方でも同じ袴姿の雪枝をぢろく、小さい眼で眺めてゐた。段々乗客が減つて空席が出来る、殊に支那女學生のふくくした姿が人目を引いた。日光は暖かく硝子戸を通して頸筋に射し込む。河岸向ふを歩く人の影が汚垢の中から時々見えたり隠れたりした。岸縁にすつと植ゑつけてある櫻は、我世の春を待顔に小さい蕾を持つてゐた。

「江戸川、江戸川です。」

終點へ來ると皆下りて了つた。例の支那婦人は妙な足形をして早稲田の方へ曲つて行く。



を出た。電車は相變らず満員であつたが、高商の制服を着た支那留學生が、雪枝を見ると急いで席を譲つて呉れた。

「何うも済みません。」

會釋して腰を卸すと、男は吊革に垂下つてニヤリと笑つた。無氣味さうに見ることもなく正面に眼を移すと、洋装の少女が瓶の前に立つて挿書があつて、食事の前に飲めば消化を助け、仕事の後に用ふれば元氣を恢復す、一度口にして忘れられぬはミュンヘンビールのみです、と書いた麥酒會社の廣告があつた。

其の上を見ると水戸觀梅列車の臨時運轉とあつて、五割引の切符は當日限り、三割引のは三日間通用としてある。公私に係はらず現金制度である都の生活の激しいのを雪枝は恐ろしいことに思つた。

江戸川行に乗代へた時に、不思議と又日本服を着た支那の女學生が前に掛てゐた。眼の巨離の遠い、額の廣い、支那人獨特の間の抜けた顔で、

無理に押し潰した底が汚垢で赤白くなつてゐた。黄色い瓦斯縞の袖の短い羽織の上から、黒い毛皮の客なテクレットを掛けてゐる。レースを括つけた白い縹緞の筒袖の上から、人形の改良服の袖のやうに紅入友禪でヒダを取つたのを二重に着て、真中から赤黒い如何にも無格好な女らしくない手がニユーと出てゐた。雪枝は疑と腫を凝らして見てゐると、先方でも同じ袴姿の雪枝をぢろく、小さい眼で眺めてゐた。段々乗客が減つて空席が出来る、殊に支那女學生のふく／＼した姿が人目を引いた。日光は暖かく硝子戸を通して頸筋に射し込む。河岸向ふを歩く人の影が汚垢の中から時々見えたり隠れたりした。岸縁にすつと植ゑつけてある櫻は、我世の春を待顔に小さい蕾を持つてゐた。

「江戸川、江戸川です。」

終點へ來ると皆下りて了つた。例の支那婦人は妙な足形をして早稻田の方へ曲つて行く。



「お嬢さん、参りませう、早稲田迄如何です。」  
大勢並んで居た車夫の一人が走つて来た。雪枝は到底歩いて行かれさうもない遠方だと思つて、

「あの、巢鴨まで……」と云ふ。

「五十銭やつて下さい、巢鴨は何の邊ですか？」  
と横から顔を覗き込んで尾いて来る。

「すつと端までよ。」

「監獄の方でございますかい？」

と云はれて竦とした。

「然うよ。」

「五十銭なら安いんです。片道で可いんですか、行きませう、お待ちなさい！」

雪枝の返答も聞かないで、車夫は俵を取りに戻つて行つた。高いとは

思つたが雪枝は黙つて立停まつた。足元が譯もなく怖々する。

其の日くの労働に依つて妻子を養ひつゝ、激しい生存競争と戦つてゐる下等社會の常として、鈍いやうな其の癖嫌に底光りのする車夫の凹んだ眼を、氣味悪く思ひながら俵に乗つた。

「幌を掛けて頂戴な。」

成るだけ人目を避ける積りで、紫の絹シヨールに深く頸を埋めた。

橋を渡ると俵は護國寺の方へ向つて真直に走つた。轍の跡からぼうと白い砂が立つた。

音羽の街幅は可なり廣かつた。雨側に並んだ屋根は何れも俯の傾いた古い家が多い。此處へ来れば最う都を離れた田舎で、早稲田や豊山中學あたりの生徒らしいのがぶらぶらと歩いてゐる外は、頓と人通りがない。割合に眼に立つのは大きな八百屋の店で、大蕪や小蕪が前に並べられて、



小器用に白い根を揃へた葱の大束が美事に積まれてあつた。色の好い林檎や最うお終ひの蜜柑が、廻りの青物と調和よく飾つてある。紙片の旗を澤山に挿した飴やの喇叭が、突然真晝の寂寥を破つて街に響いた。護國寺の前を右に折れて半町許り行くと、俵は又左に曲つて何處までも真直に走る。穢ない街で帯廣裸體のお内儀さんが、向ひの家へ走るのが見た。吹きつける強い風は赤砂を巻く。雪枝は眼鏡を忘れたことを悔んで眼を潰つた。

偶と馬の足音が聞えたので、ボカリと眼を開けると、向ふから囚人馬車が走つて来るのであつた。焦茶と黒い色の瘦せ馬が、人相の悪い二人の取者に鞭を打たれて蹄を蹴つた。

雪枝は俵の上でぶるつと慄へた。行過ぎる瞬間に振り返つて見ると、馬車の後の狭い上り口の扉が開いてゐて、中に薄髯を立てた若い看守が腰を掛けて得意氣に此方を見てゐた。

「彼車に乗せて、今日も重罪の囚人を屈けて来た歸途なんだらう。あゝ、嫌だ……」

急に心持が悪くなつて深い溜息を吐いた。俵は黙つて走つてゐる。

「うむ、！」

と牛の吼える聲が聞える、又眼を開けた。

右側が耕牧舎で大きな牝牛が澤山埒の内に遊んでゐた。左側は寺の跡らしい。墓石が數知れぬ程隅つこに積まれて、赤土の地面を平坦にならしてあつた。處々に燈籠の笠も飛んでゐる。石塔も轉がつてゐた。そして何々製紙部と書いた棒杭が打つてあつた。

何氣なく向ふを見た時、雪枝はドキンと胸に鼓動を打つた。

見よ、彼大きな煉瓦の周圍を！

「彼處だわ、屹度彼處に相違ない！」

屹と瞳を凝らすと、車夫は少し梶棒の手を弛めて、



「突當りが監獄です、何の邊まで被行いますか？」と聲をかけた。  
 「最う此處で下りてよ。」  
 「然うですか、何、お出でになる先きまで行つて宜しうございます。」  
 と徐々として俵を曳いてゐる。  
 「否、最う可いの、あとは歩くわ。」  
 「お歸りは如何ですか。お待ち申してをりますから……」と云ふ。  
 「遅くなるかも知れないから、まあ可いのよ。」  
 辻傳にさへも監獄に行く身を悟られるのが辛さに、強ひて下りて了つた。

車夫は貰つた賃錢を腹掛の中へ納めて、雪枝の後姿をぢろく／＼と見送つてゐた。

頑丈一方に建てられた高い煉瓦塙の前には茶の木が植ゑつけてあつて、其の前に四五人の車夫が日當ぼつこをしながら糞と此方を見てゐた。角

の駄菓子やに『お休所』と書いた看板が出てゐて、中に洋服の人が茶を飲んでゐた。門の右の方から典獄や看守長の官舎の屋根が幾棟も見える。  
 正面には人が一人辛つと入れる程開けてある嚴めしい鐵門があつて、右側に白いペンキ塗の小舎がある。其處に四十ばかりの門衛が突立つてゐた。もちやく／＼と髪を生えた男で頸に帽子の紐を結びつけて、二重の皮紐で吊した短銃を肩からかけてゐる。其の前に穢ないねんねこで子供を脊負つた三十計りの捲卷の女が、七八つばかりの男の兒を伴つたのと、二十七八の縞の羽織を着た商人風の男と、それから六十近くとも見える腰の屈つた弱々しい爺さんがゐて、佩劍の柄を握りながら何やら云つてゐる門衛の言葉を熱心に訊いてゐた。

女は急に泣聲を上げた。

『それがお役所の規則か知りませんが、子供が可哀想でございま



すからね、何卒逢はせてやつて下さいましよ。眞實に親孝行に出来てる子で、毎日のやうにお父さんの顔が見たいと云ひますから、お慈悲でございます、何卒一度逢はせてやつて下さいましよ。」  
と涙をぼろ／＼と零し乍ら春中の子供を揺振つて、一生懸命に頼んでゐる。

「然しね、此處では無用の者には一切面會させんのだから到底駄目だよ。惣じひに子供の顔なぞ見せちや、却て思ひ出す種になつて本人の爲になるまい。まあ今日は見合はした方が好からう。お歸り！ 又赤い獄服を着てゐる親父の姿を子供に見せるのも罪ぢやないか。」  
門衛は眞面目くさつた態度で斯う云つてゐる。

「然うでございますかね。」  
女は聲を上げて又泣き出した。男の兒は怨めしさうに門衛を見上げて、「叔父さん、お父さんに逢はせてお呉れよ。」と云つた

「一體、親父は何時出獄のだい？」  
「まだ三年も経たなきや歸りません。其の間に子供だつて何時病氣して死なゝいとも限らないし、私だつて二人の子供を脊負つて最う喰つて行かれやしません。」

ねんねこの袖を眼に當て、哀れを乞ふやうに泣き入つた。  
「然う泣いたつて爲方がない、皆親父の了見が悪いからぢやないか、妻や子のある身で此様處へ入るやうな奴あ、何うせ見込みもあるまい。」  
門衛は冷かに見下してお次に移つた。

「何誰です。」  
商人風の男に名前を聞いて、手帳に記ける。

「用件は？」  
「製品を買ひに来たんですが……」と云ふと、黙つて門鑑を渡す。  
男は早々と鐵門を通つた。女は其の後姿を眺めながら、別に理屈を云



はうでもなく、やる瀬なげに悄々と低い生垣に沿うて歸つて行つた。男の兒は冷飯草履を引摺つて、ちよこくと走つた。

「お前さんは何だ？」

お爺さんに訊ねる。

「へい、へい、私は小崎と申します。今日息子に何卒一つ逢はして戴けますやうに、へい、へい。」

穢ない襟巻を脱つて、幾度もお叩頭をした。門衝は二つ三つ訊ねて、纏て素直にやる。

「貴女は？」

先刻から此等の話を釘附けのやうになつて聞いてゐた雪枝をじろりと見た。

「ハイ。」

會釋して前へ進む。大分様子が解つたので、

「秋岡と申します。」と明瞭答へる。

「秋岡何と云ふんです。」

「雪枝と申します。」

「用件は？」と殆ど機械的に訊く。

「面會でございませう。」

「誰に面會するんですか？」

改めてなほじろく見る。

「彼、秋岡清藏と申者に……。」と語尾が慄へた。

「其の人は何う云ふ關係ですか？」

「それは彼……私の父でございませう。」

「お父さん！ 貴女のお父さんですか？ ふむ。」

感心したやうに斯う云つて手帳に記してから、例の札を渡して、

「正面に受付がありますから、其處へ被行い！」



と優しく云つた。雪枝は丁寧に頭を下げた。これが此の世の地極の澄り門かと思ふと、體が一時に引緊められるやうに感じて、足が俄に竝まつた。

七

門の中は驚くばかり廣く、然うして綺麗なものであつた。正面に登え立つた本館は最も嚴肅な姿で、此處へ入る凡ての者を睨めつけるやうに控へてゐる。真中の道は一體に小砂利を敷きつめてあつて、汚垢も立たなければ塵一つ落ちてゐない。處々に第一中門第二中門といふ木札の下つてる小さい門がある。兩側の中仕切りをした低い煉瓦塀の前には細長く刈込まれた杉がすつと並んで、其の前に小松と躑躅が一本おきに植つけてある。右側の煉瓦の後から病監の屋根が淋しく見えた。左側に

紫色に塗つた一棟がある。それは囚人の手に成つた机や本箱や、其他金物類や靴などの製品陳列場である。それと並んだ同じ建物が面會人の控所と知れた。中からガヤガヤと人聲が聞える。雪枝は珍らしげに四邊に眼を配りながら進んで行く。「受付」といふ札の下つた入口から、先刻の爺さんが出て來た。監房や作業場は何れ本館の後や中仕切の煉瓦の後にあるのであらう、何にも見えぬ。美しい春の日光は、冷酷な牢獄にも暖かく平等の光を投げてゐた。雪枝は一寸襟を合はせて受付へ入つた。小さい窓口に二三人の看守がゐた。

「一寸伺ひます。」

「何ですか？」

と一人がきよろしくして眺めた。

「私は彼の……秋岡清藏と云ふ者に面會に參つたのでございますが……」

「貴女は何と云ふんです？」



「秋岡雪枝と申します。」

「ふうむ、秋岡と……何處の國の者ですか？」

「富山縣でございます。」

「何ういふ關係です？」

「父でございます。」

看守は少時帳面を繰つてゐた。纏て真中に巢鴨監獄と刷つた野紙と硯箱を出して、

「これに宿所と姓名と年齢と關係と、それから用件をお書きなさい。然し面會時間が短いから、成るべく簡單にして要領だけ話さないで不可ませんよ。用件の範圍は家政整理上に就いてと、金員の貸借上に就いてと、其の他は身體の安否とこれだけです。」

此様處で斯うした若い女學生を見るのを寧ろ不思議さうに訝かりながら、委しく教へた。

「ハイ。」

雪枝は戦く手先きに筆を握つて書き始めた。其の間に窓の中では此様話が交はされてゐた。

「秋岡つて何だ、代議士か？」

「うんにや、破廉恥罪だ。」

「長いのか？」

「二年だ。」

「何時入つたんだい？」

「去年の九月！」

「ふむ、好い娘ぢやないか。」

「うむ。」

「よく獨りで來る元氣があつたものだね。」

「親子の情だよ。」



「親父が見たら堪るまいね。」

「うむ、辛いだらう……」

此の聲が耳に入ると、雪枝は急に胸が迫つて来て、切角書いた紙の上へボタリと涙が一雫零れた。すると、關係父——と書いた其の父と云ふ文字が黒真に滲んで了つた。それから横へ小さく書き直して、さて、用件は何う書いたものだらうと思ひ感つた。

「如何用件です。」

と看守は窓から顔を出して上眼を使つた。

「彼、色々ございますのですが……」

「いろく」と云つて、然う澤山話す暇はないから、又次にするとして今日は畧とにしておきなさい。二箇月に一度の面會は許します。」

「ハイ。」

二箇月に一度と聞いて、冷りとした。

雪枝は又筆を握つた。

一、家政整理上と自分の一身上に就いての相談。

と書きつけた。それを待つてゐて、

「これで宜しい。」

と云ふなり、看守は手に取り上げて讀んで見た。そして、

「これを持つて控所に待つてお出でなさい、後で呼びます。もしたらお父さんに逢はれるんですよ。」

と優しく云つて十三番の番號札を呉れた。雪枝は其處を出て控所の扉の前に立つた。中には如何種類の人達が集つてゐるだらう、とドキ／＼しながら把手を捻つた。

三間に四間ばかりの穢ない土間に、汚垢だらけの長い腰掛が隅の方に重ねてあつて、真中の高い所に薄縁を敷いて其處に人相の悪い下等な男が五六人輪を作つて坐つてゐた。後に先刻の爺さんが小さく首を縮めて



突伏してゐる。男等は各自に洋銀の煙管で安煙草を燻かしながら、珍らしさうに雪枝の姿に眼を注いだ。偶と腰掛の傍に三十二三の品の好い丸鬚の婦人がゐるのを見た。綺セルのコート胸を開けて、幼い兒に乳房を啣ひさせながら、これも一心に雪枝を眺めてゐる。雪枝は體裁悪げに婦人の傍へ寄つた。

「十番！」

と何處かで大聲で怒鳴つた。すると若い男等は、「さあ」と云つて總立になつた。煙草筒を腰にさすやら、前掛を掃くやら大騒ぎをして出て行つた。跡は静になつて、幼兒の寢息が幽に聞える中から、

「なむあみだぶなむあみだぶ。」

時々念佛を繰り返す老人の皴枯れた聲が、何ともいへぬ悲惨な對照を示して二人の女の胸を抉つた。

「貴女も面會で被居いますか？」

と隣りの婦人から聲をかけた。

「ハイ。」と紅くなる。

「女は此様處へ参るのが、眞實に辛うございますわね、貴女は初めて被居いますか？」としんみりした調子で云ふ。

「ハイ、初めて参りましたのでございます。」

と答へたが、此の上訊かれたら何うしやうと思つて俯向くと、

「私はこれで二度目なんでございますが、何ですか氣後れが致しましてね。彼の、面會なさる方はお親戚でも被居いますか？」

と疑と横顔を見守つた。實際此様處で斯う云ふ婦人に逢はうとは思はなかつたので、

「ハイ。」と竊と溜息を吐く。

「まあ、能くお出掛けなさいましたわね。」

蒼白い細面の眉を寄せて、心から同情するやうに言葉をつづけた。



「人間も此様處へ入れられるやうになつちや駄目でございますわね、つひ悪い氣で爲ることでもなくとも、政府の眼から悪いと見られれば爲方ありません。私の主人なぞ貴女、慾も何も知らない佛のやうな人なんぞでございますのに、此様處へ連つ込まれまして、まるで夢のやうでございますわ。」

ポケットから手巾を出して婦人は眼に當てた。

「眞實にお氣の毒でございますわね。」

身につまされて雪枝も涙合んだ。

「なむあむだぶなむあみだぶ……」

と又念佛が聞える。太く出て細く消える其の聲が、肺肝から絞り出したやうに傷ましく室内に洩れた。

「十一番！ 十一番!!」と呼ぶ。

お爺さんは勃然と起上つた。

爺さんの出て行つた跡は一層静かになつた。二人は言葉少なに各自の身分を秘すやうにして、ちよいと會話を交はした。ものゝ十五分も経つたと思ふと「十二番」と呼んだので、婦人は腰を上げた。

「さあ、お父様にお目に懸つて來ませうね、坊やは大きくなつたと仰有るだらうね。」

と幼児を腰掛の上に仰向けにして、自分の胸を合はせた。雪枝は其の間抱いてゐてやると、

「何うも有難うございます、失禮致しました、ではお先に参ります。」

場所がら御緩りと云ふ譯にも行かず、幾度も挨拶をして出て行つた、雪枝は一人残つて、あゝ世には私等のやうな悲しい思ひをする女が幾人もあるのだ！と潜然と涙を零した。大方社會黨の人か何だらう？

夫は獄やに囚はれて不在をする妻！ 丁度自分のお母様と同じである。と悄然として首垂れた。火の氣のない控所は何處となく冷々とした寒氣が



襲つて来て、自然に身裡を戦かす。

ガチリと把手を捻る音がした、かと思ふと、颯と風が吹き込む。途端に早稻田大学の制服を着た二十三四の青年が入つて来た。両方で驚いた。男は一寸帽子を脱る。

雪枝は真赤になつて頭を下げた。

「此の人も誰かに面會に来たんだらう？ 矢張りお父様かも知れない。」  
然う思ふと味方を得たやうで懐かしい氣もする。お互に堅く秘めた胸の苦悶を打明けて語つたらそんなに慰められるか……切那に感じたが、成るだけ先方へ印象を深く與へぬやうにと顔を背向けてゐた。男は見ぬ振りをして時々偷み見してゐる。

雪枝は若い男と斯うして一室に居ると云ふことが非常の出来事のやうに思はれた。胸の動悸がだん／＼高まる。さうしてゐる間に二人とも對手に悟られぬやうにして能く見盡して了つた。男の眼には女の黒い瞳と

可愛い唇が残つた。女の眼には男の濃い眉と銀縁の眼鏡と、高い背丈が残つた。

「十三番！」

雪枝は匆ね返るやうに腰掛を放れた。男に黙禮して怖々外へ出ると、青年は其の後姿を熱心に見送つて首を傾けた。

八

「貴女は十三番ですか？」と看守が訊く。

「ハイ。」

雪枝は静々と看守の後に尾いた。例の婦人は俯向ながら表門の方へ歩いて警ご此方を見て行つた。看守は「接見室」と書いた札の下つてる扉の前に立つ。手荒く把手を捻つて中へ入ると、



「此處へお入りなさい！」と云ふ。

最う一つ扉を開けて入つた。其處は一坪ばかりの狭い土間で、正面には腰の邊で厚い板の葎が下りてゐる。光線の鈍い應接室である。

看守は黙つて傍の椅子に腰を下ろした。で、先刻雪枝が書いた願書を  
見ながら、宿所姓名用件などを更に訊き直した。

「成るだけ話は餘談に渡らぬやうに……」

然う云つて後の綱を引張つたかと思ふと、ガラ／＼と恐ろしい物音がした。すると忽ち葎が上つて赭色の獄衣の仕事着に同じ色の帯を締め、浅猿しい姿が眼の前に現れた。

何たる哀れな對面であらう！

「オ、雪枝か！」

囚人は意外の面會人に驚いたやうに、何ともいへぬ哀調を帯びた叫び聲をあげた。頭髮は既に眞白で眼は一層深く凹んでゐる。後に看守が一

人殿に従いてゐた。囚人の眼からは見る／＼涙が流れて、唇がビリ／＼と慄へた。雪枝は一目見るなり最う舌の根が強附いて了つて、何とも聲が出なかつた。唯僅に、

「お父さん！」

と幽な聲を立てたさき、撞と地上へ倒れて了つた。

看守は靜かに雪枝を扶けて、

「確りしなけりや不可ない！ オイ、それぢや切角面會に來た甲斐がな  
いぢやないか！」と手を取つた。

「世話を焼かしちや不可ん！」

と囚人に従いてる看守も聲をかけた。

「雪枝！ 何うした。堪忍して呉れ！ オ、無理はない、お前の驚くのは無理がない、皆私が悪かつた、濟まん、濟まん！ 堪忍して呉れ！」



堰き上げる涙を忙しく拂つて、清蔵はぶる／＼と五體を慄はした。  
「然う泣いちや爲様がない。」  
立會の看守は落着拂つて用件の趣きを讀んで訊かせた。

「へい、へい」

素早くお叩頭を續ける。

「早く話を済まさんと時間がない！」

と今度は雪枝に注意する。雪枝は眞蒼になつて宛然石像のやうに立竦んだ。

雪枝！ 何時東京へ来た？ 何處に居る？」

「先月……参りました。そしてあの……清藤の叔母様の家に……居ります。」

断々に辛つとこれだけ答へた。

「家は皆變りなしか、お祖父様もお祖母様も健康か？」

雪枝は此處ぞと拳を握つた。

「ハイ、皆變りません。一日も早く……お父さんのお歸りを待つて居ります。」

ハラ／＼と涙が白い頬に傳はる。

「お前の縁談は何うした？ それ計り心配してゐたが……何うして此地へ来るやうになつたのぢや？」

「お父様のお歸りになる迄、此地にゐて勉強したいと思ひまして、それで参りました。何卒お許しになつて下さいませ。」

「然うか、で、鈴木の方は何うした？」

「其の儘……でございますが、多分破談になるだらうと存じます。」

「破談に？ 到頭断つて来たか？」

悔しげに齒を喰切つて、眼をパチパチさせた。雪枝は黙つて泣き咽つてゐる。



「宜しよし、來年の夏までちや、辛抱して呉れ。家へ二度も手紙を出した返答が來ない、お祖父様は病氣ぢやないのか？」

「いゝえ、少しお弱りになりましたばかりで……」

「お弱りになつたか、済まん、實に済まん。そしてお祖母様は……」

「お祖母様は一番お健康でございます。」

「兄や弟等は矢張り學校へ通つてるか？」

「ハイ。」

「オイ、其様話は好い加減にしておかんと際限がないぢやないか？」

看守は突然注意を與へた。

「へい、へい。」

清藏は又頭を下げた。雪枝は冷りとして偶と父と顔を見合はせた。何といふ色艶の悪い瘦せ衰へた姿であらう、僅半年の間に斯うも變るものか、全身の血は悔悟と煩悶とに打ち枯れて、苦役に使はるゝ勞働の爲か

若いたる手に傷々しい程生疵の痕があつた。色の褪せた獄衣の胸をあらはに外けて、襟には名に代へる番號が白い布切で縫つてある。

清藏は肩の賞標を指さして、

「待つてゐて呉れ、直歸る！ 少し、少し胸が……」

と苦しさうに胸を叩いて、跡は言葉もなく眼色で其の意味を傳へた。

冷酷な獄吏の前を憚つて、胸の中を語り得ぬ父の苦しげな舉動を見て

雪枝は、

「胸が痛いよ云ふのか、心臓でも悪いのか？」と疑と顔を見詰めた。

「オイ、早く用件に移らないか？」

看守は危なく後の綱に手をかけようとした。

雪枝は慌て、

「後生でございます。最う少時のところを、何卒お許し下さいまし。」



と看守の前に腰を屈めた。

「うむ、親子の面會はごうも叶はん！」

鬼の眼にも涙が浮かんだ。そして綱の手を引いた。

「有難うございます、有難うございます。」

と清蔵は頰にお叩頭をする。

「此様者に向つて彼様に頭を下げて卑怯な！」

と雪枝は心の中で悔し涙を呑み込んだ。

「それで雪枝！金は家から送つて貰つてるか、私の方から今小遣ひを

些と下げて貰つてやる。體を大切にしてお勉強してゐて呉れ。親父が此様

状態になつてるからとて、必ず悪い風に染むな。無分別なことをするな

叔母さんに私のことを話したか？」

「いゝえ、未だ話しません。」

「道理だ、子供に此様心配をさすのは私の罪ぢや。雪枝！怒んで呉れ

るな、罪に服して歸れば元の純潔な人間に戻る、お母さんにも能く然う  
云うてやつて呉れ！」

「ハイ、それから、お母さんは五月にお産をなさいます。」

「産を？ あゝ然うか！」

愁然として眼を閉じた。少時雙方の言葉が切れる。此の時看守は容赦

なく綱に手をかけた。

「時間だ！」

と云ふか否や、物恐ろしい音が再び二人の間に落ちた。

「お父様、屹度お大切になすつて、早くお歸りを待つてをります。」

「あゝ雪枝……」

互に交はず言葉は隔ての藪に遮られて、何方へも聞き取れなかつた。

聞耳か、遠く彼方へ連れ去る看守の劍の響きと、コトン〜と聞える靴

音が幽に〜残つた。



果敢ない親子の對面であつた。

雪枝は下げられた若干の金を懐中にして、悄然と巢鴨監獄の門を出た。幸ひ一人残つてゐた車夫を呼んで、投げ出すやうに俾に乗つた。眼を潰つても父の衰へた姿は消えず、耳を抑へても悲しげな彼聲が聞える。婆の地獄——生きながらにして彼様處へ入られるやうな者は、最う人間の數には入らぬ。暫し人間と云ふ名稱を返却して、監獄内に飼はれた動物である。再び此の世へ出て来たからとて、汚れた人！ 前科者！ として世間では最早や眞面目に見て呉れる筈はないのだから、あゝ淺猿しい猿淺しい、何といふまあ淺猿しい今日の父の姿であつたらう！ 私

彼父の子！ 彼赭色の獄衣を着た囚徒の娘である！ 雪枝は今更に憐ない我が身を自覺した。何を望み、何を希うて此の先學問などする必要があるか？ つまらない、眞實につまらない、明日からは最う學校も止さう、本も讀むまい、然うして私は誰も人の居ない野

原へでも行つて思ひ切り聲を上げて泣きたい、所詮私は泣く爲に生れて来たのである。鈴木醫學士に断られたのも今は怨みとは思はぬ。否、怨むのは私の方の勝手勝儀といふもの、若し今日の父の姿を學士に一目で見せたら、恐らく私と約束をしたことを心竊に恥ぢ、診察室で人知れず甘い戀を呷いて手を握つたことを悔むであらう、自分を傷けたと嘸殘念がるであらう！ あゝ憐れな私等親子兄弟よ！ 末代迄も永久に消えぬ家の汚れ！ 子孫の禍ひ！ 思へば何たる情ない運命に囚はれた自分共であらう！ とは云ふものゝ父の罪は罪ながら、我が身一つの榮華に値れた爲ではない、年を老つた兩親や妻や子に安心を興へたい爲、より多く悦ばせたい爲に犯した罪に外ならぬ、さればこそ斯うした生恥を曝してまでも、なほ且生きんとする父の心の中！ それを思ひやれば、怨んで済まぬ、あゝ私は父と共に泣く、一緒に相抱いて泣きたい！ 財寶も入らぬ學才も望まぬ、一日も早く父を彼の冷たい牢獄から出して、



親子諸共都の片ほとりに安らかな侘住居がしたい！ 然うして衷心した父を慰めたい！

九

雪枝は其の後神経衰弱で學校を休んでゐる。或日差出人のない小包が届いて、中から金時計が出た。そして小さい紙片に『私の誠心を汲んで下さい』と書いて鎖りに結びつけてあつた。さらでも隠蔽の不安と良心の苛責に、日夜人知れぬ苦悶をついでゐる雪枝は、政子の手前何と云ひ解く術をも知らなかつた。政子は血相を變へて雪枝を責めるのである。若い女には有勝ちの男の關係とばかり、要するにそれ以外の疑惑はないのだ。

「貴女は眞實に私を信頼つてゐるなら、如何秘密でも打ち明けて呉れるの

が當然でせう、ねえ雪さん其の金時計は誰が贈つたのです、皆話してお了ひなさい。私だつて義理ある中とは云ひながら叔母ですもの、貴女が可愛いから悪いやうに計らふ氣遣ひはありません、然うでせう、東京へ來てから誰か知合の男が出来たんですか？ 私には其様ことあるまいと思ふけれど、何しろ平素の様子といひ、今又此様贈り物があるといひ、臍に落ちぬことばかりですもの、事情に依つては打捨て、おかれなにかも知れないから、早く打明けてお了ひなさい！ 何ですか其様に恐ろしくやしてさ、貴女も單獨で郷里を飛び出して來た程の女ぢやありませんか思ひ切つてお話しなさい、叔母さんは何うしても聞かすには居りませんよ！」

と斯う盛みかけて責め寄られては、流石の雪枝も最早や堪へられない金時計は横山金次の贈り物である、といふことは直ぐ判断がついてゐるがそれに就いて、我が身の潔白を示す爲に、郷里の事情や何か一切の事を



新しく今爰に並べねばならぬ。最後には父の現在をも語らねばならぬ。あゝ思ひ切つて打明けやうか？ 忌はしい胸の秘密を悉皆叔母の前に曝け出して、跡は自然の成行に任せやうか？ 父は父、娘は娘である。叔母とて無教育の物識らずなら兎も角、今の世の知識を磨いた時代の人である。若し叔父様に對して恥かしいとか何とか、普通の女なら誰でも云ひさうな其様幼稚な頭腦で私を手放さうとするやうなら、私は最う其様人を信頼にはせぬ。叔母とも思はぬ。

斯う決心がつくと稍頭が軽くなつた。政子は雪枝の臥床を凝と見守つて、細くなつた頸を眺めながら、

「そして段々瘦せるぢやありませんか、家へ來てから瘦せたと云つては田舎の義姉さんにも濟まない譯だしね。切角學校へ入りながら何時一日晴々した顔も見せないなんて、それでは私の心盡しに對しても餘り同情がないと云ふもんでせう、私は何も恩に被せる譯ぢやありませんけれど

も、何うも貴女の舉動が怪しいと思ふことばかりですから斯う云ふんですよ、悪く推らないでね、皆話してお了ひなさい、獨りで苦慮々々してゐたつて、亂れた頭で何の判断がつくもんですか。オヤ雪さん！ 泣いてるの？ 困つて了ふね。」

政子は惘然として眼を据ゑた。しくしくと歎息くる雪枝の詫しげな姿を見れば、容易ならぬ一大事を秘めてゐるといふことも略察せられるのである。

「叔母さん、濟みません。私皆申上げて了ひます。何卒お驚き遊ばさないでお願い下さいまし。私は眞實に悪い事をしてをりました、一度は打明けねばならぬと知つてゐながら、つひ心が怯れて今日まで秘してゐたのは、全く叔母様を欺いてゐたのでございます。實は東京へ着いて叔母様にお目に懸つた時に最う悉皆お話しをする心算で出て參つたのですもの、それを今迄黙つてゐて色々御心配をかけまして、眞實に相済みま



せん。何卒御許しなすつて下さいまし。』  
破り裂けるやうな胸を抱いて雪枝は病席の上に坐つた。政子は意外の感に打たれて、身動きもせず雪枝を見詰めた。  
臘月夜の三月末、上野の彼岸櫻も昨日今日はチラホラ咲き初めて、生温い風の吹く薄曇りした暖かい晩であつた。

餘儀なく與へられた外部からの刺激と、一時一刻の絶え間なく責められる内部の傷手に堪へかねて、出京以来の苦痛を一時に吐き出した雪枝は、最も冷静に沈着して、まるで他人事を語るやうな態度で話し始めた。郷里の事情から父の現在、横山金次の強迫、ついでに巢鴨へ面會に行つたこと等、今は残る限なく語つて潜然と涙を流しながら、岸破と突伏して了つた。

始終を訊いた政子は驚くとよりも寧ろ呆れて了つた。無言の儘育て呼

吸をしてゐる。

「叔母さん、私は其ういふ罪人の子です、懲役人の娘です！」  
と悲惨な聲で叫んだ。

政子の眼からもハラ／＼と涙が零れた。

「此の上は叔母様のお心次第で私は何うなつても宜しうございます。お手許に居ては叔母様の不名譽ですし、第一叔父様に済みません！」

消え入るやうな思ひで、雪枝は政子の前に詫びた。

其時丁度二階に来てゐた客が歸つた。清藤は玄関に見送つて、何氣なく雪枝の室を見舞つた。

「病氣は何うですな？」

聲をかけると同時に、音ならぬ此の場の様子を見て、訝かしげに立停まつた。



「貴方！一寸此處へお坐り下さい、大變な事が越つたのでございます。」  
 と政子は半慄ひ聲で夫を仰ぎ見た。

「何うした、雪枝さん！」

清藤は病人に何か異状でもあつたのかと早合點して、枕に額をつけて腹這ひになつてゐる雪枝の背に行成手をかけやうとした。政子は逸早くそれを押し止めて、

「何んと申上げて可いか判らないのでございます。私は餘り意外で最うお話を致す勇氣も出ません！」

と袖で顔を隠して了つた。

「何うしたのだ、黙つてゐたつて爲方があるまい。雪枝さんが何うかしたのか？」

「ハイ、飛んだ事になりました。雪枝はこれ迄私共に全然秘密を守つてゐたのでございます。」

「それを貴女が暴露したのか？」  
 と小さい眼が例の如くに据る。

「いゝえ、今雪枝が残らず告白したのでございます。」

「雪枝さんのお父様のことか？」

「あら、貴方は何うしてそれを御存じで被居る？」

政子は又も意外に驚かされた。雪枝は冷りとしていよく堅く小さくなる。

「それなら知つてる。可哀想に然う娘を責めちや不可ん、子供に何の罪があるか？雪枝さん、心配せんでも可い、私は知つてゐるのぢやが、貴女が云はないやうだから黙つてゐたのです。泣くことは入らん。それを聞いて驚くやうな清藤ではない、大丈夫です。我々だつて何時如何こ

とで繋がないとも限らんのだぢや。」  
 清藤は斯う云つて去らうとする。政子は慌て、袖を引止めた。



「何うも面目がございませぬ。私は實際今の今迄知らないでをりました。で貴方は何處からお訊き遊ばしたのですか、何卒お訊かせなすつて下さいまし。」

「うむ、後で話す、兎に角雪枝さんを泣かすと云ふ法はない、慰めてやるのが當然です。」

「それは無論承知してをりますが、餘り驚り致しましたので……」  
と政子は狂氣の如く清藤に尾いて室を出た。跡に雪枝はわつと聲を上げて泣き入つた。

「雪枝様、何うなさいました、御病氣に障りますからお氣を靜かにお持ち遊ばせ。」

と忠實な婆やは湯呑にお茶を注いで持つて來た。

清藤と政子は二階の書齋に入つた。物事に動せぬ主人は悠々と茶を啜

りながら、略と要領だけを話した。

此の間收賄事件で巢鴨監獄に入つてゐる友人の鳩村代議士の留守宅を見舞つた。すると早稲田へ通つてゐる長男の敏三が偶々、貴方の家にお在になるお嬢さんは秋岡雪枝と云ふかと訊ねた。で自分は何氣なく然うですと答へると、不思議さうな顔をして、實は此の前の日曜に父に面會に行つた時、彼處の控所でお目に懸つた、何しろ先達お宅で一度瞥と見たばかりであるから、確とは顔を覚えて居ないが何うも何處かで逢つたやうな女である、色々考へて見たが、場所場所は場所だし不審に堪へぬので、知合の看守に一寸訊ねた。それで悉皆判つてイヤ何うも實に驚いた。世の中には私等のやうな切ない思ひをする者が幾人もあるのだと、然う思つて同情の涙を注いだ。一體雪枝さんは何うした方なんですか？

と斯う訊かれて、餘りの意外に返答も出来なかつたと話つて、  
「敏三君は自分に比較べて大變に同情を寄せてゐた。で、看守から大方



お父様の事を聞いたと云つたが、懲役二年ださうです。雪枝さんは可愛相な女だね。」と云ふ。

「まあ驚きましたね、貴方は何故其の時私にお聞かせ下さらなかつたのでございますか？」

と政子は豆粒のやうな悔し涙を落す。

「貴方も知らないやうだし、雪枝さんも秘してゐるやうだから、此方から云ふに僣びなかつたのです。寧ろ最初から打明けて呉れたら、又相當に心配もしてやるのに、女といふ者は心の狭いものだ。」

「私はまるで夢のやうな氣が致します、道理こそ何か深い事情があるらしいと思つてをりましたもの、何といふ猿淺しい身分なんでしょう、私に貴方に面目がございませぬ。で、本人も叔父様に濟まないから、此の上は何うでも御都合の好いやうにして呉れと云つて詫かびるのでございます。」

「馬鹿なことを云ひなさい、親は親、子は子です。其様親を持つた子なら一層目をかけてやるのが當然ぢやないか、私は心から同情を表してゐる。此の先も出来るだけの盡力はしてやる考へです。」

「貴方の御親切は眞實に有難うございませぬ、これが若し世間に知れますと名譽に關りますから、如何でございませぬ、一旦國へ歸すかそれとも適當なお家へ預けませうか知らし！」

「貴女は自分の姪だから何うでも自由にすれば可いやうなものぢやが、兎に角斯うして私の家へ来て、私の承諾を得て居る間は其様ことはして欲しくない、考へて見なさい、人情として何うして其様無慈悲な所爲が出来るか？」

清藤は飽くまでも寛大な處置を取らうとした。政子も無論不憚とは思つてゐるが、彼女の裏心には絶えず虚榮といふ邪魔物が附纏つて、美しい人情の鏡を曇らせやうとする。雪枝の身にそれだけの弱點があれば、



其の全部を引き受けて自分は夫の前に跪かねばならぬ、それが抑も苦痛であるのだのみならず、清藤は雪枝に對して最初から餘りに信用し過ぎる、人情があり過ぎる、と政子は思つてゐる、抑も國を出奔して来た娘らしくない行爲をさせて咎めず、今又斯る一大秘密が現れても驚くどころか、自分よりは先きに知つて居ながら尙且つ知らぬ體を装うて雪枝を庇護つてゐる、夫の心は水臭いと思つた。妻に對する愛情が予盾してゐると憤つた。

「私は雪枝を歸します。今まで私を欺いてゐたとは餘りに大膽でござい  
ますから……」

一種の反感から喝と云ひ放つた。其言葉の裏に潜む刺！ それは政子が親身の關係を忘れた嫉妬の焰であつた。

「否、其様ことはならん！」

と清藤は屹と政子を睨めた。

「國へ歸すといふことに私は同意せん、冷酷だ！　む、無情だ！　怪しからん！　尙にも教育家の妻たる者が實に怪しからん！」

と訥辯の清藤は忌々しげに唇を顫はした。

「誠に勝手がましうございますが、何卒雪枝の處置については、私の一存に任せて頂きたうございます。」

と政子は負けぬ氣の本性を現す。

「そりや無論貴女の勝手にするが可い。けれども同意するか賛成するかは私の意見にある。」

「では何うしても貴女は國へ歸すといふことに同意しないと被仰るのでございませうか？」

大きな眼が電燈の光に鋭く輝いた。

「秘密を守つてゐたと云ふことは罪惡ではない、子として親の恥を隠し



たい者があるか？ 私は國へ歸す必要を認めないのです。」  
 「然し横山金次とか云ふ男が此地へ来てゐて始終附け狙つてゐるさうで、此様贈り物まで致しますし、何うも物騒で爲方ありませんから歸した方が好いと思ひます。鈴木醫學士に斷られた意地もあるから、再び郷里へは歸らないなんて申して居りますけれども、監督する私の身になりますと、大變の責任でございませぬもの、私は最う懲々致しました。」  
 と例の金時計を出して見せた。  
 「何ういふ譯で其様物を贈つて來たのです？」  
 「雪枝の心を動かさうといふ策に過ぎませぬ。」  
 「ふゝむ！」と清藤は首を捻つて、  
 「雪枝はそんな物質的の女ではない、幼いから精神上の苦勞を積んで來てゐる程あつて、餘程超越してゐる。淺墓な男ぢや。」  
 と淋しく微笑を浮べた。そして政子の急き込む舉動を嘲けつたやうに

眼を細めながら、  
 「娘一人の監督が能う出來んやうでは、教育學者の妻として語るに足らん。貴女は少し何うかしてゐる。まあ今晚篤と思案をして見なさい、私は自分の自由を尊重すると同時に、人の自由をも決して束縛はせん。今の世に唱へられる杓子定規的の教育法には絶対に不賛成であるのだ。」  
 清藤は長く語るのを寧ろ物憂げに突立つて、早々と寢衣に着代へたかと思ふと、ラッド博士の教育學を枕元に置いて、轉々と隣室の臥床へ入つて了つた。  
 政子は獨り書齋に殘つて少時茫然としてゐた。廿分も経つと婆やが上つて來て、  
 「奥様、雪枝様は大變でござまいす。一寸入らして下さいませ。」  
 と慌立だしく云ふ。政子は夢から覺めたやうな心持ちでさよふらりとした。



「何うしたの？ お前時刻から見えて呉れたかい？」  
と急いで下へ行つた。雪枝は病牀の上で頻に悶え苦しんでゐる。と見れば、さつと紅なす多量の吐血が、白い敷布の上に火花と散つてゐた。  
「ま、血を吐いたの！ 雪枝さん、確りしなきや不可ません。何うしました。最う何も心配しなくても好うござんす。安心して私の傍にお出でなさい！」

斯う云ひながら直ぐ玄關の書生に命じて醫者を呼びにやつた。清藤も下りて来る。大騒ぎになつた。

夜は十時を過ぎた。醫者が俾で駟つけて注射をしたり、跡の養生の爲方を語つたりして歸つたのが、最う彼是十二時近くであつた。吐血は心配するに及ばぬ。精神さへ静穩にしてをれば自然に恢復すると云ふことであつた。雪枝は注射後心臓に氷囊を當て、スヤ／＼と樂さうに眠つて了つた。

斯くして雪枝は一時又悪くなつた。清藤と政子との間には時々小さな葛藤が起るやうになつた。それも薄々は推察してゐるので、雪枝は一層頭を痛るやうになつた。

十

丁度日曜の午後で清藤は此の頃信州の方へ旅行中の不在であつた。偶と鳩村敏三が訪ねて來たのである。政子はそれと聞くと早速二階へ請じて面會した。

開け放した八疊の座敷からは、不忍池を一目に見渡して、爛没たる櫻花は今を見頃に咲き誇つてゐる。盛装を凝らした數多の人は汚塵塗れになつて花の中を練り歩いてゐた。上野の櫻も此處二三日といふ所である。「如何でございます、花も今が丁度でございませぬ、上野を一通り御覽



になりましたか？」

「は、ざつと見ました。何しろ彼人込みですから堪りません。全く汚塵を浴びに行くんです。然し其處に興味があるんでせう！」

と敏三は紺緋の羽織を後へ刎ね退けて、小倉の袴をぼつと膨らませた。「然し今年は無お淋しうございませう、お察し申上げます。」

と茶を侷めながら、

「でもまあお父様は大層お健かで被居いますさうで結構でございます。」

此の間御面會にお出でになりましたか……」

「は、行つて参りました、頗る丈夫です。イヤ何うも實にお恥かしい次第で面目がありません。國民の代表者たる者が彼様處へ入つてゐるなんて、實際生きてゐられた義理ぢやないのですが……」

血氣の青年も父の罪ゆるにホロリとして、頭へ手を上げた。

「災難でございますよ。御心配遊ばさない方が好うござんす。最う今年

の秋にはお歸りになりますものね。さ、お一つ召喚れ……」

政子は櫻の花形の餅菓子を取寄せて、敏三の前に置いた。そして何か云ひ出さうとしては躊躇つてゐる。

「父が居なくなつてから、母なんか殆ど外へ出たことがないです、何うも體裁が悪いですからね、僕などでも學校へ行つて随分冷遇されるです。同情して呉れるのは一部の人のみですからね。辛いことがあります。」

テキバキと何でも秘さずに云ふ罪のない顔を凝と見て、政子は染々可哀相になつて來た。

「眞實にお氣の毒でございますわね。然ういへば此の程主人から訊きました。が果鴨で宅に居ります娘にお逢ひになりましたとか、私共は貴方、些とも知らなかつたのでございますよ。田舎の親戚の娘で此地で勉強したいと云つて参りましたものですから、お茶の水へ通はしておきましたの、所が父のことなんか少しも話さないのですもの。そして私共は黙つ



て面會に行つたのでございますよ。それが貴方、色々の事情からして漸くのこと打明けましたのです。眞實に子供は可哀想でございますわね。私は一層貴方に同情致しますよ。」

「僕も意外でした。僕達の雪枝さんは全く不幸です。で、此の頃も相變らず御勉強ですか？」

と何だか氣にしてゐる。政子は病氣の話をして今日は起きて先刻から庭へ遊びに出たりしてゐたから、此處へ呼びませうと云ひ出した。

「ま、御緩りお遊びになつて被居いませう。彼女も淋しがつてをりますし、又然ういふ似寄つた境遇のお方なら殊にお懐しがらでせうから……」

と、例になく碎けた調子で引止めた。そして婆やを呼んで雪枝に来るやうにと吩咐けた。

敏三は黙つて首垂れた儘、太い息を吐いてゐる。普通の人には用のない巢鴨監獄の控へ所で、深い／＼印象を興へられて以來、片時も忘れぬ

其の人に紹介されるのかと思ふと、我れ知らず體が慄へて心弱くも面を上げられないのだ。少時すると二階を上る静かな衣摺れの音がして、すうつと襖が開いた。途端に柔かいローズの香が四邊に散つた。政子は觸然と振向いて、

「すつと此方へお入りなさい、此のお方は鳩村さんの御子息で早稲田の文科に被行る方です。」と云つた。

雪枝は一目見ると、さつと顔を紅めた。今日は和服の相違こそあれ、儘に巢鴨で逢つた人であると思ふと、最う甚く胸騒ぎがする。

「ヤ、先達は失禮しました。鳩村敏三と申します。」

と云はれて、静かに挨拶をした。

「色々心配をするものでございますから、些と心臓を悪く致しましてね、未だ此様に蒼い顔をしてをります。」



と政子は雙方を見較べた。雪枝は黙つて俯向いてゐる。廻りのふつくりと出た挑割に結つて、頸脚がくつきりと美しい。敏三は政子の視線を偷んで喰入るやうに雪枝を見詰めた。

雪枝は性來餘り口數の多い方ではなかつた。だから斯うした場合でも先方から訊ねられることについて、漸つと其の返答をするだけで、自分からは決して談話の端緒を引出さうとはしない。殊に若い男の前に出ては殆ど無言の女となつて了ふ。それに引代へて政子は随分多辯の女である。で、敏三ともつひ二時間ばかり鳩村の家庭のここから學校のことなどを語つて居た。雪枝は好い機會を見て座を立つて了つたのである。

纏て敏三が歸つてから政子は雪枝の室へ来て、頸と敏三の才能から人格を賞讃してゐた。そして雪枝にも非常に同情して居たと云つて、  
「彼方も幼いから可なり苦勞して来た方なんですよ。何しろお母様が彼方の二つの時に離縁になつて、繼お母様が入らしつたために長男であり

ながら廢嫡されて、今の鳩村へ十の時養子に貰はれたのですの。鳩村さんには又お妾に出来た夏子さんと云ふお嬢様があつて、畢竟其方に配偶す積りなんでせう、所が其の夏子様は今同志社女學校に被居るんですが、何うも品行が餘り良くなつて、時々可厭な評判が立つんださうです。何うも今時の女學生には困りますね。敏三さんこそ眞實に可哀相ですわ、鳩村代議士の今の奥様だつて元は素性の賤しい方ださうですもの。」

と獨りで喋舌つてゐる。雪枝は病蔭の上になんと坐つて赤い色の水薬瓶を振りながら、

「鳩村様つて方は何處のお方なんですか？」  
と弱々しい眼で政子を見た。

「彼りや貴女、大阪でも有名な敏腕家の代議士ですよ。北區で鳩村と云へば知らない者はありません。相當に財産もお有りになると云ふけれど



此度のやうな間違ひがあつてね、人間の慾心と云ふものは恐ろしいもんです。貴女のお父様でも皆元は慾から起つたのですからね。溜手で粟を掴むやうな儲け方をしやうと思ふから、然う云ふ失策があるのです。私等のやうに年が年中貧乏ばかりしてゐても、心に一點も疚しい所のない者は寧ろ幸福ですよ。然し鳩村様なぞのは貴女のお父様のやうに卑しい心から出た破廉耻罪とは全く性質が違ふのですから、未だ幾らか優しですがね、貴女の家こそ困つたもんぢやありませんか？」

と話は此様風に外れて、つひ雪枝を泣かせて了ふ。それに氣がついて政子は直ぐ二つ三つ慰めるのであるが、兎に角此様調子で何かの端に父の一件を擔ぎ出しては、同情するのか抵觸するのか解らぬ事を云つて、雪枝の胸を抉る。殊に清藤は近來餘程財政の困難に陥つてゐる。で「心理的教育學」と云ふものを著述中なので、此を出版する迄は殆ど収入の途がないから、暫時の所宜しく頼むと云つて、二三の参考書を抱へた徳圓

然と出ていつたのである。政子は夫の無責任を憤つて焦々と小さい煩悶を重ねた。

或時清藤の家へ突然執達吏がぞろ／＼とやつて來た。そして家内中の道具一切を遠慮容赦もなく差押への封印を貼つた。

政子は性來の疝癪を起して狂氣のやうに怒つた、そして早速清藤に電報で、直ぐ歸つて呉れと云ひ送つた。けれども清藤は悠々とした者で、何れ一週間内には歸るが、利子だけでも都合してやれ、と云つて寄越した。其の時政子は虚榮の皮を脱いで、初めて、

「あゝ雪枝さん、著述家の妻になんか決してなるものではありません。」

と怨めしげに封印された筆筒や鏡臺を眺めた。

「叔母さん、利子と云ふのは何程あれば宜しいんですの？」

と雪枝も今は氣が氣でない。



「少くとも五十圓は用意してやらなきや承知しませんよ、高利貸なんて何と云ふまあ恐ろしい者でせう、突然に寄越すなぞ餘り失禮ぢやありませんか？」と此様場合にでも「失禮」と言ふ言葉を使ふことを決して忘れない。

「貴女のお父様も金貸しをなすつたのね、矢張り差押へなんか行つたんでせう。東京ぢや高利貸のことを騙だつて云ふんですよ。全く人の怨念でも好い死態は出来やしません。人の生血を吸ふんですもの。」

雪枝は此の言葉を聞いて腸を寸断されるやうに感じた。

「叔母さん、私五十圓のお金を何とか致しますわ。」

突如として云ひ出した。

「貴女が……何うして調達へます。」

と政子は眼を丸くして膝行り寄つた。

「此の指環で何うか出来ませんか？」

両方の手からルビー入の指環を一つと、伸で三匁程ある純金のを一つと抜いた。

「其品で……」

政子は流石に驚いた。

「真逆、其様ことも出来ません！」

とさつぱり云ひ切る。

「ですけれど此の場合叔母様はお困りですから、若し此様物でもお役に立ちましたなら、私些つとも構ひませんわ。然うして下さいました……」

……でなきや私の行李一つ封印をしないのがありますから、彼の中の品で何うかなりましたら結構ですけれど、如何でせう？」

と云はれて成程執達吏に、此は他所の娘のだからと云つて、漸う雪枝の柳行李一つだけ許して貰つたのである、と政子は疑と考へた。

「私の物と云つたら何一つ無いものですからね。」



と然うして貰ひた相に曖昧な返答をする。雪枝は押入から柳行李を出して来た。二人の相談は無論書生や婆やには秘密であつた。

「だんく暑くなりませすし、冬物は全部入りませんから……」

斯う云つて雪枝は、女には何より大切の衣類を一枚々々引き出した。郷里に居た時祖母が内職に質を預つたので、「質」と云ふものゝ性質を能く知つてゐる。それと東京へ来てから政子が時々筆筒をガタ／＼させて、纏て風呂敷包みを持つて、俵で何處とも云はずに出て行く。そんなことを二三度見受けて、質屋の通帳のあることも略推察がついてゐるのだ。

政子は辛さうに可厭な顔をして、

「然し貴女の物を借りると云ふ譯には行きませんよ、能く其様ことを知つてゐますね。」

と薄ら淋しく笑つた。容易く然うして下さいと云ふには、あまりに自

負心が強すぎる。

「否、構ひません、私は叔母様の御厄介にばかりなつてゐるのですもの、出来るだけは何なりとして報恩いたしますわ、此様衣服でもお役に立てば眞實に嬉しうございますけれど、衣服だけで五十圓出来ませるか知らず」

と云ひながら絲織の重ねや、紋羽二重の被布や縞珍の帯などを前に並べた。

「ほんのちよい／＼着だけしか持つて来てゐないんですが、碌なものはありませんけれど」

とつく／＼眺める。

「質なんて眞實に馬鹿々々しいもので價値の三分の一程にしかならないのですからね。」

と政子も、これでは少し憂束ないと云つた顔をして、侮蔑むやうに冷やかに見てゐる。



庭からは青葉の風がソヨ／＼と涼しく吹き込む。  
政子は偶と、「では斯うしませう。彼の金時計を一寸拜借。」と云つた。  
雪枝の耳にそれが一種の罪惡のやうに響いた。

十一

梅雨霽れの天気はかつと晴れて、晝の中むし／＼と暑かつたのが、夕方から心持好く風が出て街は全然夏になつた。氣早の江戸ッ兒は最う浴衣を着てゐる者もあるが、大抵はチルで人の妻が白くなつた。三田行の電車が内幸町で停まると、二三人下りた中に大きな風呂敷包を抱へて、浪と後へ倒れさうになつたのは雪枝であつた。病後の未だ足元が覺束ないので、肩で呼吸をしながら少し行つて右手の仄暗い横町へ曲ると左側の軒燈に眼を注いだ。懐中から叔母の手紙を出して見る。生れてから初めて

潜る質屋の暖簾！と思ふと、我にもなく寒くなつて思はず四邊を見廻した。あゝ世が世なればこそ、此様使ひも甘んじて爲なければならぬ。自分の衣服と、彼蛇蝎のやうに嫌つてる金次から贈られた、意味のない此の金時計とを持つて、質屋の前に悄然と佇む此の姿を、獄囚に繋がれてる父に見せたら……郷里に淋しく暮してゐる失意の母に見せたら……あゝ父母は私の爲に恐らく氣絶するであらう！と熱い涙を溢した。聽て唯ある格子の前に立つた。

『大和や。』

と紺暖簾に白抜きで染めてあるのが瓦斯の光りて明瞭と分る。障子に人影が動いて中から男の聲がした。雪枝は二三間行き過ぎた。それから又戻つて来たが誰も出ない。で、彼影法師が歸つたら、と幾度も往つたり来たりして時間を空費した。するとガラリと格子が開いて出て行つたのは半被の男であつた。雪枝は疎と身慄ひした。脇からはしつとりと汗



が出てゐる。廳で雪枝は思ひ切つたやうに突ち中へ入つた。誰も居ないだらうと思ひの外、框に腰をかけてゐる男と女、立つて太い格子の中を見てゐる三十餘りの貧相なお内儀さん、それに番頭と押問答をしてゐる書生が一人ゐた。帳場に白熱燈が垂下つて、其の下に薄穢ない黄絹の蒲團もある。麻繩をかけられた澁紙包みが二つ三つ投げ出されてもゐる。十五六の俐巧さうな小僧が襷がけで甲斐々々しく其の一つの紙包を解くと、中から洗ひ晒した縮の單衣物が二枚と、子供の浴衣が一枚出た。

『それだよ。ほら御覽な、矢つ張りあつたぢやないか、流れたなんて喫驚しちやつた。』  
と貧相な女は行成斯う云つてニヤリとした。  
『普通なら四月で流れる筈なんですからね、此は特別です、え、二ニニが六の五六三十と、利子は三十錢頂きます。』

小僧は片手で札の皺を伸ばしながらバチ／＼と算盤を弾いた。

『オイ、未だ分らんのかい？』  
書生は格子に捉まつて眼鏡越しに、頻と帳簿を繰つてゐる蒼白い顔の番頭を睨める。

『何うもございませぬやうですな、最う流れたんです。然うお諦め下さい！』

『だつて無断で流すちう法がないぢやないか、一應何とか通知があつて然る可きだね。何うも怪しからん。』と力む。

『何しろ大勢様のことですし。それに四月経てば流れると云ふことが丁と通帳の始めにも書いてありますから、それ迄に利子を入れて下さらなさや流して可いと思倣して、差支がございませぬのです。へい何うもお氣の毒様です。』

ぼんと帳簿を閉ぢて、番頭は冷淡に書生を見上げた。  
『彼品は君、親父の記念だせ。流されちア實際困るんだ、キョウ』



「夫程に大切の時計なら、貴方の方で打捨つてお置きになるつて法がないぢやありませんか？」

と澄まあしてゐる。すると框にゐた女は「あゝ。」と次伸をしながら、

「小僧さん、未だかい、早く願ひますよ。」と云ふ。

「長ざーん。」

と小僧は土蔵の方を向いて怒鳴る。

「貴女、拜見しませう！」

番頭は莞爾して優しい聲で雪枝を呼んだ。

時計を流されたと云ふ書生は膨れつ面をして屹と雪枝を顧みた。雪枝は怖々してゐたが、黙つて風呂敷包を潜らせて其の上に手紙を置いた。それを見ると番頭は、

「はゝあ。」

と上眼で雪枝を見て頭を一つ下げた。廻りの人は珍らしげに質使する此の若い女の風采を眺めてゐる。土蔵から出て来た長ざんは、色の褪せた木綿蚊帳の縛つたのを肩から下ろして、

「あゝ辛つと分つた、暑い〜。」

と羅紗の前垂で額を拭いてゐる。框の女は突と立つた。

「随分待たせるぢやないか、早く勘定してお呉んな。」と突慥に云ふ。

請戻す時は大威張なのだ。

「オイ〜俺のは何うして呉れるんだ。其品と取代へて損な筈は決してないよ。出す方は夏服ぢやないか。」と隣の薄髯も立つ。

「ですから、何卒利子だけ戴きます。何うも冬服の中古ばかりは實際困りますんで、へい。」

番頭は雪枝の衣服を擴げて價踏みをしながら、器械的の返答をしてゐる。



「困るね。」

海摺は利子を拂ふ金すら持たぬらしい。で何かぶつ／＼云ひながら腕を組んで失望らしく又櫃に腰を下ろした。三十七八の眼の鋭く光る色の悪い男であつた。

「一寸お待ち下さい！」

斯う云つて、番頭は雪枝の品物を悉皆奥へ持つて入つた。其處へ又書生が一人入つて來た。懷中から洋本を二冊出すが否や、

「オイ、一兩！」

と投げつける。年上の長ごんは一寸愛嬌笑ひをして、

「一枚ですか？」

と受取つて、サラ／＼と頁を繰る。病理學の本らしい。所々に人間の顔だの手足の挿繪が入つてゐた。雪枝は此等の光景を眺めて、何となく面白いやうな、安心したやうな、そして世の中を茶化したやうな、妙な

心持ちになつた。此處に居る女も男も平氣な顔で、専ら得々としてゐる。其の態度が、如何にも豫想外であつたのだ。然うして今此人々が一度此處の暖簾を潜つて外へ出ると、各自に分以上の假面を被つて白を切つてゐるのだ、と思ふと、何となく可笑くつて堪らなかつた。

少時すると、奥からころ／＼した幼さい小僧が出て來て、

「清藤さんつて方、何卒此方へお入り下さい！」

と云つて横の仕切を開けた。雪枝は冷りとしたが、黙つて尾いて行く。傍の者は疑と後姿を見送つた。

茶の間を隔てた四疊半に、先刻の番頭と胡麻鹽頭の主人が、電燈のコードを伸ばして金時計の價値を見てゐたらしい。

「何卒此方へ！」

主人は雪枝を瞥と見た。

「五十圓は少々難かしようございますが、切角のことですから今晚の所は



お間に合はせ申します。其の代り何卒成るだけ早くお出し下さるやうに、奥様に能く然う被仰つて下さいまし。』

と云ひながら、眼鏡を外した。

『斯う云ふ品は誠に分り兼ねるものでございますから、へい。』

と番頭も言葉添へる。纏て皺くちやの五圓紙幣を十枚雪枝に渡した。と同時に雪枝の衣服は彼女の父の運命と同じに、繩をかけられて土蔵に禁錮されたのである。雪枝は一種の不快と失望と、それに云ふ可からざる侮辱を感じて悄然と歸りかけた。すると、下駄を穿いてから番頭が慌て、

『あゝ清藤さん、それから今月中で満期のが二口ばかりありますから！』と帳面を擴げて見て云ひ足した。

雪枝は傍の者等の手前、云はでもの事をと不味い顔をした。

外へ出ると、一時に汗が引込んでホッと太息を吐いた。雪枝は初めて

金銭の尊さを知つたのである。

『彼衣服は最う二度と着られるか何うか分らぬ。』

と考へると、意味もなく淋しい感じが起つて、熱い涙が込み上つて来た。それと同時に彼金時計が甚く心掛りになる。で、トボく〜と日比谷公園の方を向いて、薄暗い道を辿つて行く。

月のない日比谷の夏の夜は、雪枝の胸に一種の恐怖と好奇の心を誘つた。彷徨と青葉の下を輕装の若い男女が幾組となく摺れつ纏れつ手を列ねて語り行く。それを見ると、處女の血は怪しく燃える、胸は騒ぎ立つ。涼しい夜風は青白い瓦斯燈の光りと共に身に迫つた。

『あゝ。』

雪枝は疲れ果てた人のやうに、唯あるベンチに我知らず凭れ掛つた。そして恍然と星の瞬く空を見上げた。



偶と郷里の鈴木醫學士を思ひ出したのである。あゝ戀！、あれは私の初恋であつた。お父様の罪惡さへなかつたら、私は戀人から捨てられることはなかつたらうに、と今更のやうに悔しい。最う今後は私にあんな美しい戀を味はへることが出来ないだらう！ 淋しい！ 實に寂しい！！ 私のやうな淋しい女があらうか？ 剩さへ力と頼んだ叔母の此の頃の仕打ちを思へば、此の先何時までも清藤の家に厄介になつてゐる譯にも行くまい。殊に叔母は私を郷里へ歸したがつてゐるもの……

私は假令他人の家に奉公する憂目を見ても、決して郷里へは歸らぬ。幾百里を隔つた都にゐてすら、なほ且捨てられた男の面影が絶えず自分を苦しめるではないか？ 何の顔下げておめく！と今更國へ歸られやう彼が秋岡の娘よ、懲役人の子よ、と市中の人から後指さされるだけさへも、頭が上らぬやうな自分共ではないか？ 雪枝はつくづく叔母の家の現在を考へて心細く思つた。樂さうに見せ

かけてゐたのも、畢竟するに叔母の虚榮であつたのだ、と殊更一種の不安が起る。そののみか、叔母は時々私の爲に清藤と衝突してゐる。それを見るのが苦痛である。あゝ此の夏中休暇中を何うして暮したものだらう？

取り止めもなく、それからそれと考へながら、總て自働電話の前を通つて、正門から出やうとすると、外から三人連の學生が入つて來て、行成、

『ヤ。』

と立停まつた者がある。他の二人は洋杖を突いて同時に足を止めた。

『何方へ？』

パツと巻煙草の吸殻を捨て、麥藁帽子を脱つたのは鳩村敏三であつた。

『あら、何うも失禮致しました。』



構はず行過ぎやうとした雪枝は狼狽して挨拶をする。今頃此様處を一人  
で通つてゐたのを見られて冷りとした。

「お一人ですか？」

「は、叔母の用で一才内幸町まで参りましたのですが、少し頭痛が致し  
ましたから公園を抜けて見ましたので……失禮致します。」

「辨解がましく云つて去らうとするのを、敏三は訝かしげに眺めて、

「電車でお歸りになるんでせう。」と云ふ。

「は。」

「其處迄お送り致しませうか？」

「いゝえ。大丈夫でございます。」

「然うですか、では失禮します。皆さんに宜しく。其中上ります。」

「狎々しく斯う云つて敏三は友達と一緒に大きな桐の下駄を引摺りなが  
ら去つた。」

雪枝は電車に乗ると、

「込み合ひますから懐中物御用心を願ひます。」

と云ふ車掌の聲を聞いて、竊に内懐へ手を入れて見る。

「悪いところを見られたわ。」

と思ひながら吊革に垂下つて、少時敏三のことを考へた。許嫁のある

人！と思へば氣がおけて口を利くのも餘り好い心持はしない。殊に叔

母が、同じ法律の罪人となつて其の責に服してゐる鳩村代議士と自分の

父を見るに、餘りに異つた判断を下して隔てをつけるのが如何にも不愉

快で堪らぬのである。

十二

南藤が歸ると高利貸と交渉の結果、一先づ封印を解くことになつた。け



れども雪枝の衣類にかけられた紐は容易に解かれさうもなかつた。それは尙可、其の後大和やへ行く使は殆ど雪枝にのみ限られるやうになつた。雪枝は此ればかりは身を切られる程辛く思つたが、それも黙つて辛抱した。然し心の中では血の涙を絞つて、時々日々谷の新緑の木蔭に亘んではひとりで泣いた。

『来年の夏迄……お父様が出獄なさるまでは如何ことでも堪へませう！』然う思つては観念してゐた。政子は清藤の顔さへ見れば、何やら不平を並べて始終争つてゐた。一體政子は何でも物を誇張して云ふ癖がある。そして清藤が家にゐる時は油断なく雪枝の舉動に注目した。だから清藤と雪枝とは殆ど顔を合はす機會すらなかつた。斯う云ふ風に妻の警護が手厳しくなるに、清藤の方では勢ひ一度雪枝に染々と逢つて色々慰めてやりたいと云ふ氣が絶えず頭腦に往來してゐる。

或時婆やが此様ことを云つたことさへある。

『何うして奥様は旦那様が御在宅の時に、雪枝さんに彼あ辛く當りなされるのだらう。御自分の姪ぢやないかね。』

誰に云ふともなく臺所で云つたのを、偶と玄關の中井が聞いて、『つまり嫉妬さ、婆やなんかでも家にゐたら屹度俵の嫁に妬くんだらうな。』と笑つた。

『嫌だよ、中井さん、私は何も其様ことで奉公してるんぢやないよ。全く嫁と合はないからさ。此年になつて爲方なし出てゐるんですわね。苛めちや不可ませんよ。』と眞顔になる。

『は、は、は、失敬々々。君に憎まれると明日から早速喰物に祟りが来る。取消取消、これ此の通りお詫び致す、眞平御免下さりませ。』

と飄々な身振りをして謝罪の所作をした。婆やは何かぶつく云つてゐる處へ、庭へ打水をしてゐた雪枝は、赤い襷をかけて水口から入つて来た。片手に如露を下げて汗ばんだ顔を拭いてると、中井は嫣然と笑つて、



「雪枝さん、其様に働きなると又病氣になりますよ。今ね、婆やと噂をして居たんです。女も餘り美人に生れると、所謂美人薄命でいろく傍から迫害を受けねばなりませんね、然う思つて僕と婆やと二人で非常に同情して居たんです。雪枝さんは其様ことを感じなさらないですか、婆やは又實に雪枝さん思ひですからね。」と面白さうに云ふ。

雪枝は黙つて笑つたまゝ、婆やの顔を見てゐる。  
「中井さんてば、餘計なお喋りばかりするんだよ。彼方へお出でなさいな。」

「恐縮々々、男子は須らく臺所に立入るべからず、吾輩の估券が下る。」  
中井が去ると、雪枝は棚から石鹼箱を取つて手を洗ひはじめた。

「何うかなさいましたか?」  
「今ね、朝顔を一つ鉢に植ゑて來たの、可愛い可愛い花が咲いてよ。無器用だつて叔父様の前で又叱られちやつたわ。」

「だつて貴女、お若い方に何うして其様ことが上手に出来ませう、御無理でございますよ。」

と婆やは慰め顔になる。

「いゝえ、全く私は無器用に違ひはないけれど、叔母様のやうにガミ〜被仰つたつて爲方がないわね。」

と眼を濕ませながら髪を撫でつけてゐる。

「眞實にお察し申しますよ。能く貴女は此様に温順しくして被居いますことね、私は見てもお氣の毒で堪りませんのでございますよ。」

婆やはハタキにする紙を折りながら、疑と雪枝を眺めた。其の時玄關にお客の聲がして二階へ上つたらしい。

「お茶だ、お茶だ。」と中井が顔を出した。

「何誰?」

と婆やが訊くと、中井はソレと雪枝の方を顔で杓つた。



婆やは微笑を含んで番茶を焙じ出した。それを持たせてやると、

「お客様？」

と雪枝は一寸お化粧した美しい顔を向けた。

「鳩村様の若旦那様で被居います。」

「然う！」

去り氣なく答へると、

「此の頃はちよい／＼お見えになるぢやございませんか？」

と意味ありげに云ふ。

「然うね。」

「来年御卒業になると、直ぐ御結婚遊ばすんでございますつてね。夏子様とか云ふお嬢様は眞實にお幸福な方でございますよ。彼様好いお聲さんをお貰ひになつて。雪枝様も何卒彼あ云ふ優しい旦那様をお持ちになると好うございますわね。婆やはお祈りしてをります。」

「私なんか……」と打消して、

「私等は普通の人と比較物にはならないのよ。生涯獨身で暮す心算なの。

私なんかは其の方が屹度好いのよ。」

ペタリと坐り込んで番茶を啜りながら落着いた調子で斯う云ふ。

「飛んでもないことを被仰います。貴女のやうにお美しいお方が何うして、世間ちや許しませんですよ。私は何時も然う思つてゐるんでござい

ますが、鳩村さんに其のお嬢様がなかつたら貴女が嫁らしたたら眞實に好い御夫婦だと思ひましてね、染々夏子さんつて方が憎らしうございま

すよ。何だか餘り品行の良くない方だとか云ふお話でございしますが、寧ろ彼若旦那様がお復りになると好うございますわね。幾ら財産がお有り

になつたからつて貴女、子練三合の聲喧もありませぬもの、其様身持ちの悪いお嬢様を押つけられてお可哀想ぢやございませんか。」

と折つた紙を揃へて熱心に語りつづけた。雪枝は紅い顔をして、



「婆やは随分ね。其様こと出来やしないわ。幼いから鳩村様へ貰はれて被入つてるんだつて云ふもの、今更ね、何うして其様不義理なことが出来るもんですか。御恩がわ……」

「でも貴女、娘が氣に入りますんからつていへば、それ迄ぢやございませんか？」

「真逆！」

雪枝は何の意識もなく恍然と庭を眺めた。七月中旬の午後の日光は、裏の杉垣に強く當つて、隣りの庭に干してある浴衣の洗濯物が糊強の袂を突張らしてゐる。其と並んで紋りや晦しのお襦袢が澤山行列して高々と懸けられてあつた。時々戶外の方からザワ／＼と砂が立つて来る。

「熱いわね。」

斯う云つて偶と立たうとしたところへ、又中井が出て来た。

「菓子やの使ひも今日は此で三度、眞實に能く客のある日だね。僕直に

外へ廻るんだから、持つて来たら宜しく頼みましたよ。」

と黒木綿の兵児帯を締め直しながら、安つばい麥藁帽を阿彌陀に被つて、裏木戸から出て行つた。間もなくアイスクリームが四つ来る。雪枝はそれを持つて二階へ上つた。風通しの好い座敷に清藤と敏三は對坐して巻煙草を燻かしてゐる。政子は傍にゐて賑かに喋舌つてゐた。

三人の前に一つ宛置いて、餘つた一つを盆に載せた儘政子の脇に引寄せて去らうとする。

「貴女も此處でお喰ひなさい。」と止める。

「有難う！ あとで……」と會釋して立ち掛ける。清藤は瞥と見て、

「雪枝さん！ 一緒に何うですか。」

と云つた顔を、透かさず政子は凝視した。其が怖さに遠慮して下りて了つた。

敏三はさも失望したやうに竊と雪枝の後姿を見返つた。



それから敏三は上野の図書館へ来ると云つて、殆ど毎日のやうに清藤の家を訪づれた。其の都度假令清藤は不在でも、政子と親しく話してゐた。晩餐を済まして行くことも珍らしくはなかつた。政子は其の敏三殿貞である一も敏三二も敏三と、何の話の中へでも敏三を引合に出して、其の才を賞めたり境遇に同情したり、又或時は敏三の歸つた跡で少時茫然と考へたりしてゐることもあつた。姪である雪枝ですら色々の秘密を持つてゐたにも拘らず、他人の敏三が胸を開けて恥を曝す心根がしほらしいと、政子はずくづく信頼する、自分を嬉しくおもつた。家庭と云ふものに對して至極冷淡な清藤！何處か奥歯に物の挟まつやうな雪枝！何れもこれも他さ足らぬ。敏三のやうな男こそは、眞に女の伴侶となるべき人であると、政子は半敏三を買被つて了つた。

敏三は来る度毎に夏子に對する不平だの、養子である身の不満を訴へて政子の同情を買つた。小才の利く敏三ははやくも政子が機嫌買ひの女

であることを推測して、努めて政子に取入るやう八方苦心を繰らしてゐる。然しながら政子は淺慕と云つても、敏三が内々雪枝に野心を持つてゐる位のことには疾に感づいてゐる。けれども然うなると政子の方では一種の勝利を得たやうな氣がして、何處までも白々しく外交術を振舞つて對手を焦らした。そして時々此方からも雪枝の不運を語つて、

「何しろお父様が彼様譯ですから、誰も貰つて下さる方はないだらうつて、大層悲觀致しましてね、眞言に可哀想なんですよ。一生獨身で暮すなんて云つてますけれど、然うも行きませんからね、寧ろ國へ歸して下さるはうかと思ひます。」

此様調子で男の心を惹いたりした。すると敏三は或時言葉の端に、鳩村家を離別して生家へ復籍したいと云ふやうなことを仄めかせた。其の時も政子は頭から押へつけるやうに遮つて、

「幼少からの恩義があるから然うは行きませんよ。夏子様だつて無教育



の女ぢアなし、立派に新時代の教育を受けて被居る希望に充ちたお方な  
んですもの、真逆風説程の醜行もないでせう。まあ御辛抱なさつてお上  
げ遊ばせな。何の彼のと被仰つて被居つても、最う少時の間で、來年の  
今頃になれば丁と御夫婦にお成り遊ばすんぢやございませんか。眞實に  
今が一番お楽しみな時代ですわね。お羨ましいわ。」

と斯う云て一層敏三に氣を揉ませる。他の話なら如何に打解けても、  
或事に限つては決して胸の鍵を開かなかつた。そして自分の前に敏三を  
跪かさねば止まぬ決心で、戀に囚はれた若い男を翻弄してゐる。生れ落  
ちてから實母の温かい情も知らず、冷たい繼母の手に生ひ育つて、又更  
に新しい養父母の前に小さくなつて來た敏三は、絶えず我が周囲に一種  
の不安と恐怖を感じて、何事をなすにも前へ一歩後へ二歩と躊躇ふ癖が  
ある。だから優柔不斷は渠の性格となるまでに矛盾した男となつた。故  
に一方では寸時の隙なく強い戀に囚はれて、苦しい衝動に悶えながら、

他の一方では鳩村家の恩義を思ひ、財産を思ひ、夏子を思うて、容易に  
政子に向つて戀の苦悶を打明けける程の勇氣がないのである。ところが政  
子は意地悪く敏三の前では雪枝を賞め稱へて、氣品の高い娘であるとか  
思慮の深い女であるとか或は清藤が非常に可愛がつてるとか云つて、戀  
に狂ふ心を唆かした。

十三

八月中旬過ぎの最も熱い日であつた。清藤は一週間ばかり房州へ例の  
草稿を持つて旅行した不在中のことである。政子は桃の喰過ぎから下痢  
症を起して病床に就いてゐた。敏三は型の如くに夕方五時頃から毎日訪  
ねて、政子の枕元で親しい談話を交はしてゐたが、歸る時に偶と人知れ  
ず玄關で雪枝に一通の封書を手渡した。



雪枝は譯もなく無間とガタ／＼慄へてゐた。不忍の池に蛙鳴く雨催ひの晩で、餘りの蒸暑さに寝つかれぬところから幾度か蚊帳を出ては、雨戸を空かして風を入れた。敏三の手紙を読んでから胸騒ぎがして何うすることも出来ないのである。で、又竊と豆洋燈を點して最う一度読み返しをやつた。

手紙の文句は悉く小説的であつた。現代の思潮に觸れた青春の夢のやうな淡い空想から描き出された宛然一篇の詩とも見るべき流暢な筆つかひは、處女の心を唆かすには餘りに拵へ過ぎた嫌ひがある。そして最後の要領は、是非一度逢つて色々話したいから、何卒機會を作つて呉れ！と云ふことであつた。

雪枝は自分で抑へ切れぬ程激しい感情に驅られた。若し夫程に眞實に私を愛して呉れるなら、今からでも直達つておもふ存分に泣きたい！罪人の子と知つて眞の愛を注いで呉れるものは神の外にはないと信じて

ゐたが、敏三は果して私に美しい清い愛情を永久に澱いで呉れることが出来やうか？ 第一恩義の柵みに繋かれた許嫁のある身ではないか？ 道ならぬ戀は徒らである。とは云ふものゝ此が若し誠の戀であつたとすれば……あゝ何うせう？

雪枝は幻のやうに敏三の姿を思ひ浮べて、四邊へ忍び音に泣いた。

「何故涙が出るか？」

と自分に訊ねて見ても薩張り解らぬ。

「自分に疚しい心がなければ、泣く必要はない筈である。」

と思ふと、我ながら恥かしくなつて身裡が熱くなる。假令自分の方でも多少戀？らしいものを感じてゐたとして、遂には他人の夫と定まつた人であつて見れば、所詮私は悲しい運命に陥ることは理の當然である。あゝ結婚を意味しない戀！ 其様浮氣な戀なら何時でも出来るのだ。私は慰みに弄ぶやうな戀はしたくない。然しながら戀其のものから云へば、



眞の慈の美と周囲の事情とは無論没交渉であらう。けれども然う云ふことは倫理といふ學問が許さぬ……。

理智の判断に明るい雪枝は、一度失戀の苦い汁を味はつて頭腦が一層冷やかになつてゐた。で、それきり手紙の返事も書かず、敏三が來れば成るだけ避けるやうに努めてゐた。

八月も末になつて何處となく初秋の風の吹く月の好い晩、敏三は政子と縁に掛けて十二時近くまで話して歸つたことがあつた。

それから數日足を遠ざけたが、九月に入つて、最う學校も始まると云ふ前日、敏三は甚く酒氣を帯びて、夕方飄然と前庭から座敷の縁側へ廻つて赤い顔を出した。

「オヤ入らつしやい、大分久らくでしたね。」

と行水から上つて來た政子は片手に濡れ手拭を下げた儘、派手な浴衣の襟を一寸摘んで艶々しい笑顔を見せた。

「奥さん！ 今夜は是非訊いて頂かねばならんお話があつて上つたので、お差支がありませんか？」

と例に似合はず語氣が荒かつた。で、充血した鋭い眼を光らせて、ごしんと縁へ上り込む。

「伺ひますとも、さあお敷き遊ばせ。只今直ぐ承りますよ。」

と政子は皮の坐蒲團を翻めて次の間に退つた。手早くお化粧をして纏て帯を結びながら出て來ると、敏三は腕を組んで何か頰りと考へて居た顔をふいと擡げた。

「奥さん、僕今夜こそ決心致しました。僕は今晚残らず自分の意中を打ち明けます。何卒一片の同情を濺いで下さい。僕はこれ迄幾度か話さうと思ひながら、遂に心弱くも語り得せませんでした。僕は卑怯だつたです。實に薄志弱行の卑劣極まる男子だつたです。其處で今夜こそは偽らず飾らざる所を申し上げますから、御遠慮なく何卒お叱り下さい……」



と云ふ言葉の調子では可なり酔うてゐるが、呂律は確であつた。

政子は此の様子を見て、さてはいよく酒の力を借りて一件を持ち出すな、と稍會心の笑を口の廻りに湛へた。

「まあ、大變の御機嫌ですこと。何處で其様に召飲りました。お珍らしいちやございませんか？」

と落着き拂つて、態々雪杖を呼んで洋盃に汲立の水を持つて來させた。敏三は甘さうに其を飲みながら、

「奥さん！ 僕、斷然鳩村家を離別しやうと思ひます。夏子は到頭學校を飛び出して丁つたさうです。僕は多年の恩義の爲と云つて、彼様不貞な女を妻とするに忍びません。で、今日は早速巢鴨へ行つて養父に面會して來ました。養父の云ふのには、自分は最う出獄に間もないことであるから、何卒何事も夫迄は中止にしてゐて呉れ、萬一夏子に到底見込が

ないとするれば、強ち鳩村家を離別しなくとも、夏子と結婚さへ爲なければ好からう。そしたら又何とか好い方法もあらうから、兎に角自分の歸る迄は騒いで呉れるな、と云ふことだつたです。イヤ、どうも非常に痛快でした。何しろ夏子には情夫があるのですからね。」

嫉妬と憤慨の激情に驅られて、敏三は男甲斐もなく涙を溢した。

「情夫があるなんて、其様證據があつたんですか？」

「然うです、學校の舎監から云つて來ました。矢張り同志社の生徒と逃げたらしいです、僕はつくづく感じましたね、彼女のお母さんは京都の藝者だつたと云ひますから、然う云ふ淫奔な血を受け繼いでゐたのです。西洋の偉人には私生兒が多いと云ひますが、日本の妻の子には確な者が出來ません。僕は實に憤慨に堪へないです。」

唇を噛んで敏三はさも悔しさうに腕巻りをした。

宵月は美しく前裁の松に射し込んで、垣根に蟲の音が細う聞える。



涼しい夜風は逆上た敏三の顔を冷すやうに心持よく吹き入つた。政子は呆れて凝と見てゐたが、今婆やが置いて行つた珈琲茶碗を手にしながら、「困りましたね、夏子さんが其様ですと、貴方こそ眞實に詰まらないぢやありませんか、切角樂しみにして被居るのに……」と半冷笑るやうに大きな眼を据ゑた。

「イヤ、僕は夏子には些とも未練がないです。唯僕は彼から踏つけにされたと思ふと、残念で堪まりません。僕はこれ迄彼女の爲にまるで玩弄にされてゐました。見て下さい奥さん、此の手紙を。」

と敏三は懐から優しい女文字の手紙を五六本引出した。其の中の一通を手早く引抜いて、

「此處を一寸読んで下さい！ 斯う云ふ甘い戀を語つて、彼女は僕を釣つて居たんです、夏子は實に淫婦です、妖婦です。」  
と他の手紙を端と薄縁の上に叩きつけた。

政子は突きつけられた一節を読んで見ると、冷りとする程極露骨に戀情を寫してあつた。で皆讀むのも氣が咎めるので直ぐ巻返して封筒に納めた。

「迷ひですね。一時の熱でせう。此様に貴方を慕つて被居つて、他に心の動く譯がないぢやありませんか。屹度男に欺されなすつたんですよ。何うも京都あたりの學生は柔弱ですからね。」と首を捻る。

「で、奥さん、僕は断然夏子を捨てます。否僕の方で夏子から捨てられて了つたのです。然し僕は茲に復と得られない希望を持つてゐます。僕の全身の愛を競ぐ婦人は僅つた一人、雪枝さんと云ふ人があります。奥さん、何卒雪枝さんを下さい。僕は巢鴨でお目に懸つて以來、實は竊に戀をしてゐました。それから今の境遇を聞いて一層深い同情を表してゐます。假令今鳩村家を去つて一介の書生となつても、愛する人の爲には屹度豪くなりますから、何卒安心して僕に下さい！」



急き込む敏三の舉動は到底尋常の振舞ではなかつた。酒の上とはいえ斯う單刀直入に切出されては、政子とて返答の爲様がない。「貴方の思召は有難いけれども、まあまあ然う急かないで能くお考へ遊ばせな、如何事情があつたつて、今貴方が鳩村家を離別なさると云ふことは至つて不得策ですからね。兎にかく來年の卒業期迄は蟲を殺して御勉強遊ばせ。其中鳩村様もお歸りになることですから、然うしたら御實家の方とも御協議の上、若し圓滿に解決がつくものなら結構ですからね。急いでは不可ません、夏子さんは夏子さん。鳩村家は鳩村家で別でせう。私は貴方の將來を思ふから決して悪いことは申しませんよ。ね敏三さん然うでせう。切角是迄に修業して今突然に飛び出して御覽なさい、佛を作つて目を入れないも同じです。それに鳩村様も不幸中のことですから其處は少し御辛抱遊ばさねば義理が濟みません。鳩村様の云ひ分は能く解つてるのですもの。飽くまでも我意を張らうとなさると却つて不利益

です。夫よりも先きに夏子さんをつ探し出して、お諫めなさるのが順序でせう。雪枝のことは未だ年も行きませんし、學校も後二年位はやらなきやなりませんから、當分動くやうなこともありません。其の中萬々一貴方が鳩村家を去つて、夏子さんの縁が全然切れて了ふやうな場合があつて、雪枝の方でも未だ何處へも縁談が定まつてゐないやうでしたら、改めて其の時の話にしても遅くはないぢやありませんか？」

政子は得意の雄辯を振つて滔々と水の流れるやうに論じ出した。けれども敏三は政子の言葉に掛引の多いのを不快とした。殊に雪枝の話に至つては不得要領此の上もない。政子が先夜同情の餘り自分の弟のやうに可愛く思ふ、と云つた言葉を思ひ出して、炎々と疑惑の念を起した。然しながら政子の態度は、遂に敏三をして自然に疑惑を氷解さす程、寧ろ狎々しいものであつた。政子は敏三の境遇に同情すると同時に毎時自分分の境遇をも訴へて敏三の同情を求めた。彼女は肉親にすら容易に打明



けなかつた家政上の不如意までも敏三に語つた。無論清藤が妻に對して夫らしい情愛がないと云ふことも話した。

夜が深くて敏三の醉が醒めるに従つて、二人の話聲がだん／＼小さくなつた。政子は時々惘然として、

『私なんか眞實に詰まらないものですよ。著述家の妻になる女程不幸な者はありません。私は寧ろ往昔の女教師時代が戀しくなつてまゐりました。』

と染々妻としての儂なさを歎じた。

『お子様がないから其様悲觀が起るんでせう。清藤様は彼も云ふ、人だから表面は冷淡に見えるんです。僕は著述家の妻になる方は幸福だと思ひますね。僕等も將來には一大傑作を出す積りです。然し今の世に立つて行かうとする藝術家は、往々生活の爲に迫害を受けますが、何、倒れる迄はやる考へです。藝術の爲に倒れるなら本望ぢやありませんか。』

だから僕は多少矢張り其様趣味を解して呉れるやうな人でないと、夫婦にはなれないんです。雪枝さんなら屹度僕を解して下さるだらうと信じてゐるんです。』

敏三は美しい空想の夢を見てるやうな表情をして、政子の淋しげな眼色を讀んだ。春秋に富んだ敏三の眼は活々として希望と抱負に充ちてゐる。政子は弱氣ある青年の氣焰を聞いて、何となく清藤の行爲が逆鱗いやうに感じられた。そしてこれから青葉の芽を出さうとする人と、既に實を結ばうとして、未だ完全な時期にも到らず、獨りよがりに超然としてゐる人と思ひ較べて、

『清藤なんか最う時代後れで駄目ですよ。其の中葬られるかも知れませんが。』

と社會上に於ける夫の地位を甚く不安らしく云つた。



暑いくと云つてゐる間に暑中休暇も済んだ。政子は毎年夏にさへなれば歌を詠ふやうに避暑に行きたいと云つてゐたが、到頭今年も夫れがお流れになつたと云つて、清藤が歸つて來ると、充まらないと云ひ通してゐた。年中不在ばかりで張合がないとか、他所の夫のやうに妻に親々しないとか、其様ことばかり云つて清藤をトツチメてゐた。清藤は別に逆ひもせず唯黙つて苦笑してゐた。

雪枝も學校へ通ひはじめた。國へ歸す歸すと云ひながら、つひ持つてゐる衣類を残らず典物にして了つた所から、オイソレと歸す譯にも行かぬやうな破目になつて、するくになつて了つてゐる。庭にコスモスの花が咲いて、朝顔がだんだん小さく凋れて了つた。雪

枝は櫻の散つた頃病後の徒然に、月見草や黄蜀葵やダリヤなどの種を蒔いておいたので、此の頃可愛らしい花の咲くのを樂しみにして、毎朝早く起きて庭へ出た。政子の起きて來ぬ中に、中井と二人で下座敷を掃除して了つて、髪も結つたり着物も着代へたりして了ふ。そして何時でも學校へ出られるやうに、自分だけお先に御免蒙つて支度を済ましておくのである。

或朝例もよりは早く起きて、直ぐと不忍へ散歩に出掛けた。蓮の花の開くのを見物に毎朝暗がりから詰めかけた精力家連も、此の頃は大部分影が減つて、此處彼處に顔色の餘り好くない人が彷徨と歩いてゐた。新鮮な未明の空氣はしつとりとして、足元の芝生に昨夜の露が重く宿つてゐる。東雲の空はだんく紫色になつて、曉の明星が二つ三つ瞬いてゐる。博覽會の第二號館であつた勸業協會の白い建物や煙のやうに浮んで、遠くに霞む東照宮の森影や精養軒からすつと丸萬あたりの裏手に、未だ消



えがての瓦斯や電燈が細く點いてゐた。草叢にこぼろぎの聲が時々断れ  
く、に聞える。

『あ、秋だわ。』

と思ふと、何となく迫るやうな悲哀を感ずる。

其の後最う一度父に面會に行かうと思ひながら、自分の病氣や何かで  
紛れてゐた。今年の夏の獄内生活は嘸辛かつたらう、と自分も初めて遇  
つた東京の暑さに驚いて、此の頃の夜毎に染々考へるのである。

『其の中乾度行つて参りませう！』

と深い溜息を吐いて凝と池の中を眺めた。聽て雪枝は前後に人影の絶  
えた隙を見て、懐中から横封の小さい状態を出した。それは昨夜敏三が  
一寸來て行つた時に、又秘密に手渡した手紙である。

ペンで走り書きした細かい文字はスミレインキの香が高い。所々に横  
文字も交つてゐた。先頃の返答を呉れないと云ふ怨みやら愚痴やらを並

べて、此の間政子に話したことを聞いたか、それについて貴女の決心が  
承りたい！、若し貴女が僕の現在を憐れと思つて呉れるなら、來る何日  
の夕方觀月橋の袂まで一寸御光來を願ひたい、と書いてある。

昨夜は殆んど眠らないで考へ明して、未だ心が迷ふので、今又新しい  
頭で判断を試みた。けれども最う思ふまい！ 考へまい！、とする後か  
ら腕も動く我心を制しかねて、自分ながらやる瀬ない思ひに頭を掻き  
亂される。家では普通以上に嫉妬心の深い、猜忌心の強い政子に監視さ  
れてゐる體である。若し此様秘密事を悟られたらそれこそ大變の騒動に  
なつて了ふと、心恐ろしくも思つてゐる。あ、行かうか？ 行くまい  
か？ 行くのも怖い、行かぬのも惜しい、近寄つてはならぬ、と強い理  
性に制へられ乍ら、何といふことなしに心を引摺られるので、逢つて思  
ひきり泣いたらば、と云ふ若やいだ心も起る。  
空は劃然と明るくなつて來た。雪枝は未だこれと云ふ思案もつかぬ中



に急いで家へ歸つた。そして間もなく袴を穿いて學校へ出て行つた。

元代識士鳩村忠夫は十箇月の苦役を果して無事に出獄した。其の日清藤等も行つて小酒宴をやつたが、直に青山の假住居を引拂つて大阪の本宅へ戻つた。それから敏三は一人戸塚村の或寺に引移つて自炊を初めた。其の話を政子から聞いた翌くる日である。雪枝は日の暮れるのを待つて人知れず外へ出た。忍ヶ岡に蜩の聲が、強い刺激にそののかされたやう耳をついて、空は少し曇つてゐた。冷々として身に染む秋風はセルの袂に軽く靡く。觀月橋を渡ると丸い瓦新燈の下にイんでゐる敏三の姿が忽ち眼に入つた。

「ヤッ！」

と帽子に手をかけて、

「何うも恐縮でした。」

と少し狼狽氣味である。幾らか酒氣を帯びてゐた。雪枝は體裁惡さうに一寸腰を屈めた。二人連の男がチューと唇を吸つて傍を通つて行つた。敏三は先に立つて辨天の境内に出ると、池の方を向いて唯あるベンチに腰を下ろした。

「まあ、お掛けなさいー」

「ハイ。」

遠慮勝ちに自然としてゐる。敏三は突と傍へ寄つて、

「雪枝さん……貴女は何故先達の御返答を下さらなかつたのですか？ 僕は非常に恥ぢました。」と小聲で囁いた。

「何うも失禮致しました。」

「イヤ、僕の方こそは突然に失禮なことをして済みませんでした。然し今夜は斯うしてお出で下さつた位ですから、無論僕の衷情を汲んで下さ



つたんでせうね。」

「……………」

「雪枝さん！」

「ハイ。」

「貴女、叔母様から何かお聞きになつたでせう！」

「いえ。」

「僕のことについて何もお聞きになりませんか？」

「夏子様のことなら伺ひました。」

「イヤ然うぢやない、貴女に關することです。」

「いえ、別に……………」

「酷いな、奥さんは實に變だ。僕には貴方に話したと云つておきながら、何うも怪しい。」と頭を振つて、

「然し雪枝さん、僕は最う斷然鳩村家を去る考へなんです。此の間養父

が歸つた時に一騒ぎをやつたのですが、何れ後から交渉しやうと云ふことになつたのです。そしたら僕は殆ど天下の孤兒です。雪枝さん、貴女は僕に同情して呉れませんか？、僕は巢鴨以來非常に懐かしい印象を與へられたのです。」

と情に迫つて敏三は行成雪枝の手を握らうとした。雪枝は少し放れた。「貴方のお心は嬉しうございますけれど、私は罪人の子ですから、何事も御遠慮致しますわ。」と竊と涙を拭いた。

「罪人の子だつて親は親、子は子ぢやありませんか？、僕は貴女の心中を察してゐます。親は假令何うであらうと、戀する者の眼から見れば、凡てが皆美です。」

「では戀が冷めたら、凡てが穢なく見えませうね！」  
「其様ことはありません。貴女は案外の皮肉家ですね、何うも驚いた。僕



は喋舌ることが下手だから眞實に困ります。兎に角掛けませう。此方へ被入い。」

これなら中々話せる、と云つた調子で敏三は袂から半巾を出して、ベシチの埃を拂つた。

「恐入ります。」

雪枝は小さくなつて端の方に一寸腰をかける。ソヨ／＼と足元が薄ら寒かつた。

秋風立つ不忍池畔の夜は深沈として静かであつた。と見れば池の向ふに並んだ待合の二階から薄りと明りがさして、遠音に三味線の低い調子も聞える。或家では雑伎の踊る影法師も幽に見えた。雪枝は聴くともなく耳を澄まして髪と頭を垂れてゐる。

斯うした華かな世界を眼の前にしながら、絶えず味氣ない世をおもふ

自分が哀れになつて来る。

「雪枝さん……」

「ハイ。」

「僕が若し鳩村家を去つて、夏子との縁が全然切れて了つたら、貴女は僕と結婚することを承諾して呉れますか？」

「私、結婚なんか致しませんわ」

「何故ですか？」

「私は郷里で或醫學士と約束が出来てゐましたのですが、父が囚はれた爲に破約されましたのですもの。」

「それは奥さんから訊きました。けれども貴女はそんな人を無論心から愛して被居たのではありますまい。」

「けれど約束を承諾した位ですから無論嫁く積りでをりましたのよ」  
無邪氣らしく斯う云ふのを敏三は飽足なく思つた。



「其様に確な約束を破るとは、醫學士も實に無責任極まるですね。だから貴女は最う結婚しないと被仰るのですか？」

「ハイ、世間には道徳を犯す罪人は幾らもあります。けれども夫は誰も罪人として認めません。が、法律を潜る罪人は天下の罪人として囚はれます。私共は天下の罪人の子として一生を葬られて了ひますのよ。」

「そりや雪枝さん、餘り狭い見です、其様不徳義な醫學士を以て、世間の凡ての男子を律せられては困りますよ。罪人の子といへば僕等も表面は矢張り罪人の子です、唯血を引いてゐないと云ふだけで、世間からは同じに見做されてゐます。けれども僕は然う云ふ一般の俗な頭腦を持ちません、物の解らない世間の云ふことなど結局何うだつて可いちアありませんか。は、は、は、」

と敏三は苦しうな笑ひ方をした。  
「けれど世間の制裁は私共にとつて最も苦痛ですもの……」

と少時考へて、

「ですから敏三さん、貴方も鳩村家を出るなど、被仰らないで、夏子様と圓滿にお暮し遊ばせよ。恩人を捨て、去れば假令此方に如何道理があつても世間は排斥して容れませんわ。」

「然し不貞な女の下に屈從してゐるに忍びませんからね。結婚の要素は愛情やありませんか。僕は夏子と云ふ女に最早や愛情は持ちません。雪枝さんは最初の失戀の爲に再び戀する熱がないと被仰るのですか？」

「あ、雪枝さんには僕の心が未だ解らないのだ。」

敏三は失望の聲を上げて、洋杖を振りながら彼方此方を歩き出した。頭の上の楓の葉にざわ／＼と風の音がする。

「遅くなりなますから私最う歸りますわ。今後はお手紙も頂きません。一時の感情の爲にお迷ひになると、終に私まで切角の決心が鈍つて了ひま



すから……」

雪枝は思ひ切つたやうに立つた。敏三は慌て、  
「では雪枝さん、貴女は何しても、何うしても僕の心を解して下らさらないのですね。」と残念さうに云ふ。

「然うちやありませんけれど、貴方が鳩村敏三さんで被居る以上は、心で若し如何に思つても、二人の間に戀することは許されません。戀は自由で何物の干渉をも受けないと被仰るか知れませんが、それは理想ですわ。到底現實には出来ません、私は苦しい心を押へて斯う申上げるのですから、敏三さん、お怨み遊ばしちや困りますわ。」決然と云ひ放つ。

「……………」

「ねえ、歸りませう！」

二人は少時木蔭を歩いてゐたが、間もなく雪枝の姿がひとり悄悄と辨天の橋に消えた。

自分に戀する男を憎む女があらうか？

雪枝は敏三と素氣ない別れを

してから、何か斯う取り返しのかぬ失策でもしたやうな残り惜しい感情と、勝ち誇つたやうな一種の反抗心の満足！と云つた矛盾した感情との戦闘をついけた。けれども自分の境遇を知つて救はうと云ふ敏三の心を思へば、矢張り懐しい、慕はしい。憎まうたつて憎まれやしない。然し敏三が鳩村家の姓を犯してゐる間は、何として他から戀する餘地がないのだ。あゝ、最う此様懊惱はすつぱりと拂つて了ひませう。

斯う思つては淋しい秋の日を鬱々として暮した。

或日突然巢鴨の父から手紙が来た。封書の中にも外にも検閲官の印がベタ／＼と幾つも捺してあつて、文面は至極簡単に少し話したいとがあ

十五



るから、近日に是非一度来て呉れと云ふことを繰返し〜書いてあつた。夫を政子に話すと、

「私も一緒に行つて上げますからお待ちなさい。」

と云つて、一人で行くのを許さなかつた。それは自分がチク〜と雪枝に辛く當るのを父に喋舌られうかど云ふ邪推から出た防禦策であつた。斯うして一日々々と延びてゐた。其の揚句に強く野分の吹き荒ぶ晩であつた。能く熟睡してゐると、枕元へ常服を着た父の姿が現然とあらはれた。

「雪枝！ 雪枝！！」

と慄ひ聲で呼び起す。

「あら、お父様！」

行成縫りつかうとすると、忽ち其處へ過日立會つた二人の看守が現れて、没義道に父子を引放した。挫と後に打倒れた清藏は力のない哀れな

聲を出して、

「雪枝！ 長い間色々心配をかけて済まなかつた。私の罪もいよく今日で滅びた。最う青天白日の身になつたよ。私の爲に親や妻子を苦しめて何とも申譯がなかつた。堪忍して呉れ！」

と手を合せて慟哭した。

「お父様！ 貴方は何時お歸りになつたの！」

と又縫りつく。清藏は屹と雪枝を抱きかかめて骨も砕けよとばかり、

「あゝ可愛い！」と刻みつけるやうに言つた。

途端に、看守は荒々しく清藏を足蹴にした。

「貴方は餘り残酷です、父は最う罪人ではありませぬ！」

と幾度か腕立ては起き上らうとしたが、足に錘がついたやうで一寸も上らなかつた。苦し紛れに看守等の顔を滅茶苦茶に引つ掻いてやらうと焦燥つたが、如何せん、手も動かなかつた。



「お父様早く此方へ被入い！」

云はうとする、此度は咽喉が塞がつて聲が出なかつた。地團太踏んで焦りに焦つてる、と見る間に父の影が何處ともなく淡く消えて了つた。

「お父様！ お父様！！」

と必死に叫んだ。其聲に驚かされて、はつと夢から覺めたのである。

「あゝ苦しい。夢で好かつたわ。」

汗みごろになつて正氣に返ると、顔は洗つたやうに涙で濡れてゐた。

括り枕が湿々してゐる。四邊は眞の闇で隣の室から婆やの寢息がスー／＼と洩れる。天井に穴でも掘るのか、コツ／＼と木を噛む鼠の牙の音が聞

えた。

「あゝ恐ろしい……」

胸を揉りながら高く響く動悸を静めて雪枝は寢床の上に戻つた。

未だ父の姿が眼に残つてゐる。偶と、仄暗い鐵窓の下に居穢なく横はつ

てゐる怪物のやうな襦色衣を思ひ浮べて戦慄した。瞬間に「病氣ぢやあるまいか？」と云ふ懸念を直覺的に感じた。

夜の明けるのを待つて臥床を放れると俄然夥しい鼻血が出た。すると、

「お父様に異變があるんぢやないか？」

と又悚とした。

三日目の朝、果して父の訃音に接したのである。それは雪枝が今學校へ出やうとしてゐる時に、

「電報！ 電報！！ 秋岡雪枝と云ふ人がゐますか？」

と云ふ聲を聞いたので夢中に飛び出して見ると、

「チ、シンダシラセ キタ スグ ヌクハハ。」

と云ふのであつた。

「叔母さん、父は亡くなりました。あゝ到頭彼様處で亡くなつて了ひま



した。

と二階へ上つて轉び伏した。

『えッ。』

と政子は眞蒼になる。

『何うした。』

と清藤も覗き込む。

『うむ、郷里へ直接知らせたな。雪枝さん、氣の毒でしたな。』

『眞逆彼様處で死ぬとは思ひませんでしたに、あゝ、私、最う一度會ひに行つとけば好うございました。父が如何にか私を待ちましてせう……』

……あゝ、残念で堪りません。』

と正體もなく雪枝は泣崩折れた。

『兎に角これから直に巢鴨へ行きませう……』と清藤が言ふ。

『貴方、入らして下さるのですか？』

と政子は異様の聲を發した。

『うむ、行つて能く調べて置かにやなるまい。』

『では私も参ります。雪枝さん、早く支度をなさい……』

三人は朝飯も匆々にして家を出た。外は最う劔のやうな空つ風が吹いてゐる。上野から電車に乗つて池袋の停車場で下りた。直ぐ前にある菓子屋の横の小路を曲つて田圃道を行くと、巢鴨監獄の裏手へ出る。三人は口を噤んで思ひ／＼に人生の悲哀を感じながら、長い煉瓦の周圍に沿うて歩いた。逝く秋の美しく澄み切つた空に、朝日は弱々しい光線を投げて、時々魔の吠え聲のやうな風が踏んで行く足元の赤砂をばつくと吹き捲くつた。

『此様處で死ぬなんて、何と云ふ慘目でせうね。』

と政子は半巾を眼にあてた。

『叔母さん、最う被仰つて下さいますな、涙が出て爲方ありませんか』



ら……」  
父に逝かれた後の不安に襲はれて、雪枝は覺束なげにトボ／＼と歩いてゐる。

漸く辿り着いて清藤は鐵門の前に立つた。例の通り型のやうな質問を受けて受付へ行くど、看守は他の獄吏を呼んで来た。

「秋岡清藤は始終病氣勝でした。然し行狀方正にして能く獄則を守る所から、遂からず假出獄を許される筈であつたが惜しいことをした。病名は急性肺炎ですが、最後は舌を噛み切つて自殺を遂げたのです。で、死骸は其の儘棺に納めて、雜司ヶ谷の共同墓地に埋葬してあります。病監にですか？ 十日ばかりおりました。熱が高いので始終囁言を云つてゐたが、別に遺言もなかつたやうです。尤も死ぬ日迄娘の名を呼んで、會ひに来るんだとか、看病に来るんだとか云つておりました。娘が此地に居るなら此の世の終りに對面させてやりたいと思つた位です。看護ですか、

親子ならまあ藥の一杯も飲ませてやるとか、死水を取らせる位のごときは、特に許す場合があるのです。は、あ此地に居たのですか？」  
看守はしげ／＼と雪枝の顔を眺めた。

「然し獄内でも病監に入れば中々行届いたものです。粥も煮てやる、卵も呑ませる、無論醫者がゐる薬も十分に宛てがふ、それに看護人が附いてゐるから些ども怨みはありません。唯自分の家で死なれなかつた云ふだけです。貧困者などは此處で死んだ方が却て幸福ですよ。死ねば枕元に襦も立てゝやる、教誨師が来て引導も含めてやる。若物は自分のに着代へさせて、そして棺に入れるのだから、家の者の世話がない。」  
と淋しげに笑つたり、眞面目腐つたりして、陰鬱な顔に色々の表情をしながら得々として語りつづけた。

三人は其の足で直ぐ俵を備つて雜司ヶ谷へ行つた。其處此處と探し廻つて漸く見出した新しい棒杭！ オ、それこそ空しく天下の罪人となつ



て我と我罪に滅びた秋岡清藏の最後の解決を示したのである。雪枝はと夕と地上に顔を埋めて泣き沈んだ。

郷里からは母の藤尾が出て来るのかと思ひの外、七十に近い高齡の祖母と、弟の弘二が出京した。藤尾は産後の肥立が悪いのと、嬰兒が生れ落ちるからの病氣の爲に、止むを得ず来られなかつたのだ。二人が清藤の家へ着いた時は、清藤の亡骸は最う火葬に附して、丁度今朝政子と雪枝が骨揚に行つて、歸りに近所の寺で形式ばかりの法事を済まして歸つた所であつた。自殺と聞いて流石に祖母は泣いた。

「お祖母さん、叔父様や叔母様に大變御厄介になりましたから、能くお禮を被仰つて下さい……」

と雪枝は喪心したやうに懺然としてゐる。

「眞實に何からお禮を申上げて可いやら解りません。誠にハヤお取かし

い次第で、皆様に顔向も出来ませんでござりますよ。なむあみだぶ、なむあみだぶ。」

と老母は珠数を爪繰りながら念佛を唱へた。若いから男優りと云はれた有名なお婆さんである。

「委び婆なんかよぼよぼと出て来なくとも可いのに、お父様がお金を持つてるだらうと云つて、其を取りに来たんだよ。此の頃はお母様と喧嘩して爲方がないせ。直ぐ別居すると云つてら、眞實に我利々々婆だよ。」と弘二は雪枝の傍へ来て、竊と呟いた。

「まあ、其様に喧嘩するの？」

雪枝は胸を痛くした。

「うむ。姉さんの行爲についても随分お母様を苛めたよ。」

と疑と姉の顔を打守つて、

「姉さんは最う國へは歸らないの？」